

池窪弘務作品集2 戯曲1

[ホームに戻る](#)

目次 [リンクをクリックして下さい。](#)

[作品1](#) 胡蝶

劇団りゃんめんにゅーろん上演（1991年）

[作品2](#) バスが行く

劇団コロロ上演（1997年）

[作品3](#) トランプの家の迷子たち

[作品4](#) 瓶の中

京都・スペース・イサン東福寺（2000年）

[作品5](#) 失われた時間

星と泉18号（2015年）

[作品6](#) 回路

登場人物

胡蝶 十八才 巳（蛇）さん占い。女占い師。

平太郎 七十五才 演歌師

作造 八十才 蝦蟇の油売り

男（声） 二十五才

女（声） 二十七才

—

舞台と客席を分離しない。客席も含めて、一つの世界であり、体験である。連続する空間と時間。

現在と過去が交錯する。舞台装置は、老人二人が腰掛ける床几以外特にいらぬ。石切神社の場は、スライドを使っても、何もなくてもよい。

上手半分の真つ暗な舞台（ここで演じられるのは、主に過去である）。闇は観客の想像の場になる。

闇の中で何かが動く気配がする。数分前から（予

定された開幕時刻から、すでに芝居は始まっている。開幕ベルはならない。

猫のなきごえ。闇の中で、声と音だけの芝居が始まる。

胡蝶 来はった。

戸を開ける音。

男 逢いたかった。どない会いたかったか……。

何処におっても、思うのはお前のことばかりや。なにしてんのやろ、なにを思ってんねんやろ。一分でも一秒でもはよ顔が見たい。

胡蝶 うちも、うちもや。

抱き合う男女の気配。

胡蝶 そんなせかんでも。

衣擦れの音

男 胡蝶、寒むないか？

胡蝶 寒いことなんかない。あんたの体が熱い。ほ
れ、あんたの体に汗が浮いてる。

男 なんの音や？

胡蝶 ほおずき。待つ時間が長がすぎる。

男 がきみたいやなあ、ほんなら、わしは、胡蝶の
ほおずきならしたる。

胡蝶 あつ、

(間)

男 胡蝶、わしにほおずきくれへんか？

(間)

男 み、みいさんは？

胡蝶 あそこにいたはる。

男 何や、天井にいたはったかいな。

男女の絡み合う音。

男 胡蝶、そんなことしたらあかん、出てしまうがな。あかんいうのに。

胡蝶 出したらええやないの。又、大きいしたげるよって。

バサツとものが落ちる音。

女のうめき声。

男 みいさんが来はった。みいさん、この子の首絞めたって、もつと、もつと締めたって。

胡蝶 あっ、止めて、みいさん、うち、死んでしま
う。

男 どうや、気持ちええか？

胡蝶 あっ、あっ

男の息が乱れる。女の息が乱れる。抱き合う男女
が一瞬見えて、闇に溶ける。後は、男と女の息づ
かいだけが小さく聞こえる。それは、やがて、川

のせせらぎに変わる。

下手にスポットがあたる。床几に平太郎。

平太郎 音川の流れる音は変らへんけど、昔は蛍が群れるほどおった。まるで、霧が光ってるみたいやった。それに、玉虫もよう飛んできた。水を飲みに来る狸や狐もよう出おたなあ。ほんま、おらんようになった。そんで、人間の数だけがやたら多なつてしもた。

客席から作造が胡蝶蘭を片手に登場。

平太郎 作やん、今日も石切さん参ってきたんか。

作造 そうや、毎日の、たった一つの楽しみやもん。下るんも一歩ずつ、上がるんも一歩ずつ、途中で死ぬかもしれへん。

平太郎 きれいなあ、その花こうてきたんか？

作造 胡蝶蘭や。

平太郎 高いもんこうてきて、金持ちやなあ、作や

ん。

作造　すぐ枯らしてしまうんがせきの山やけど、何や、懐かしい氣して。

平太郎　（蘭の鉢を手にとり）紋白蝶がとんでるよ
うな花やなあ。

作造　もう三十年か。

平太郎　胡蝶はんのことか？

作造　うん。

平太郎　うちの光子がランプ占いで、胡蝶はんが
みいさん占い。

作造　どっちも、石切さんの美人占い師でえらい評
判やった。

平太郎　うちのは、もう年増やったけど、胡蝶はん
は十八、色がぬけるように白かった。

作造　みいさん参ります。あの澄んだ声が忘れられ
へん。

平太郎　その声に誘われるように、真っ白い蛇が手
を合わせた胡蝶はんの二の腕をゆっくりと上が
って行く、ほんで、肩のところで　鎌首あげよる。

作造　後は、神憑りになって、みいさんのお告げ。

胡蝶はんは何も覚えてへん。

平太郎 みいさんは、寒いのに弱いよって、冬は抱いて寝る言うてたなあ。

作造 (首をかしげる)

平太郎 どうしたん作やん？

作造 あんなもん、どないして抱くんやろ。

平太郎 さあ。

作造 それに寝てる内に……。あったかいところ、あつたかいところ入っていきよる。ほんで最後は。

平太郎 なに考えてるんや、作やん。やらしいんやから。

作造 やらしいて、あんたも考えてたん。

平太郎 ……。うちとおんなじ長屋で壁一つ、よう猫が来とつた。

作造 猫？

平太郎 うん、いつもうちのタマのあほが騙されて、表にすつ飛んで行きよつた。

作造 (振り返る) あれ、後ろを誰かが走つたで。

平太郎 うわあ、包丁をくわえた女が、ものすごい顔して走って行きよる。

作造 鬼や、あれは、鬼やで。

作造、平太郎上手に近づき、暗闇の中を伺う。音と声だけの芝居。

戸が、激しい音をたて、開けられる。

女 何や様子がおかしいと思てたら、やっぱりや。

男 ちゃうねん、ちゃうねん。

女 そんなかつこうしてて、なにが、なにがちゃうねんよ。お前か、泥棒猫は。うちの人をたぶらかしよつて、殺したる。ええい、殺したる。

男 止めて、止め言うのに、ひゃー、危ない かな、かんにんやさかい。

作造 刃物振り回すのだけは止め。

激しく争う音。

男 ひゃー。(男がひっくり返る音)

作造 どないしたんや、平さん。

平太郎 畳に出刃包丁が突き刺さってる。

平太郎、作造の横からのぞき込む。

平太郎　みいさんの頭を出刃包丁が突き刺しよった。

男　分かったで、わしはこの畜生にたぶらかされて

たんや。なんや、目がさめた気する。

胡蝶　畜生違う、神さんや、あんたは、神さんを殺したんや。

女　なな、何を言うんや、なんやその目は、人の男とつといて、よう、そんなことが言えるわ。

男　何を言うてんねん、わしがこんな小娘に本気で惚れると思うか？ちよと考えたら分かるがな。

男　な、帰ろう。わしには、お前しかおらへんねんから。

作造　そんなに、葉屋の養子がいごちええんか。

平太郎　胡蝶はんに言うてたんはみんな嘘やったんか？。

男　うるさい、他人が何をごちやごちやぬかす。

女　この畜生、まだいごいてくさる。縦に裂いてやる。

男 止め、もうええやないか。

戸が荒々しく、閉まり、男と女が去って行く音。

胡蝶 みいさんかんにん。痛かったやろ、かんにんや。かんにんや。

胡蝶のすすり泣く声。やがて、それが狂ったような笑い声に変わっていく。平太郎、作造下手に

作造 あんな事があったんか。

平太郎 えらい騒ぎやってんけど、あんたは、東北の方に行つてて知らんだんやなあ。

作造 季節は何時やったんやろう？

平太郎 夏や、うちの前にようけほおずきがなつてて、

胡蝶（声） おじさん、一つもうてもええ？

平太郎 一つでも、二つでも持って行き、又、ほおずき鳴らすんか。

胡蝶（声） うん。

平太郎 まだ、子供なんやなあ、胡蝶はんは。

胡蝶（声） しらん。

平太郎 そんな走ったら、こけるがな。背中に商売道具担いで、ほおずきならしながら、坂道を降りていく後ろ姿。綺麗というより一途で可憐やった。

（間）

作造 蝦蟇の油売りで、日本中回ってたもんな。帰ってきた時は、胡蝶はんは、每晚石切さんに立ってた。

平太郎 昼間は誰も姿見たもんはおらへん。真夜中になると、真っ白な一重で、どこからかすーと現れる。それは、月明かりに浮かぶ真っ白なみいさんみたいやった。

作造 あそこへ行ったら、綺麗な女がいる。僅かな金で抱ける。悲しい話しやなあ。話しかけても、澄んだ目でじっと見るだけ。ときどき、鈴を振ったように笑う。

平太郎 胡蝶はんは、誰かを探してたんやないやろか？ 男に抱かれた後、いつも、気落としたよ
うな目をして、相手を見るとい話しやった。

作造 猫のなき真似のあの男を探しとったやろか？
あんなむごい仕打ちをした男を。恨むんちご
て、気がふれても、まだ探してたんやろか？

平太郎 さあ、

作造 探して、殺すつもりやったんやろか？

平太郎 それとも、抱かれるつもりやったんやろ
か？

(間)

平太郎 わし、あん時の事今でも夢にみる事 があ
るねん。

作造 あん時って？

平太郎 春とはいえまだ、寒かった。梅は清らかに
咲いても、桜はまだやった。

作造 (歌う) 梅は咲いたか、桜はまだかいな。

平太郎 作やん、歌下手やなあ。

作造 蝦蟇の油売りは歌うたわへんもん。

平太郎 光子と、しょうもない事から、ものすごい夫婦喧嘩したんや。光子が、浮気する甲斐性もないくせに言いよった。何を言いやがる、わしも男や、浮気ぐらいしたるで言うて、千円持って、家飛び出した。

作造 千円やと、ちよつとたらん。

平太郎 うん？

上手の闇の中に、平太郎が飛び込む。同時に上手の闇が消える。

石切神社の社（スライドでも、何もなくても良い）が現れる。舞台全体は薄暗い。稲妻が光り、雷鳴。

平太郎 もう、お百度踏む人もいてへん。空は、真つ黒や。えらい天気になってきたなあ。

平太郎、あたりを見回す。

平太郎 胡蝶はん、胡蝶はん。たしか、こなへんや
て聞いたんやけど。なな、何を震えてるんや。
わいも男やないけ。浮気の一つや二つ。それに、
胡蝶はんは、わいの憧れや。しようもない奴に
抱かれるんやったら、わしが抱いたる。あんな
光子と別れて、胡蝶と一緒に住んでもええんや。

二三步下手に歩く。再び、稲妻、雷鳴。平太郎、
頬に手をやる。

平太郎 降ってきよった。

平太郎、社の軒下にかけて込む。雨の音。

平太郎 せやけど、このまま帰られへんし、どない
しよ。それに、ちよつと、怖なってきた。猫の
真似でもしたるかニヤ。いちびってる場合ちが
う。何や、泣きとうなってきたなあ。

気を取り直したように、又、舞台中央に。

平太郎　胡蝶はん、胡蝶はん、おったら返事して。
なんもせえへんから、出てきて、急に話しがし
とうなつたや。みいさんは三輪のお山に帰らは
つたんや、いつまでも泣いてたらあかん。

平太郎、社の方を見る。

平太郎　胡蝶はん、胡蝶はん。

平太郎、社に近づき、空を見上げるが、ふと、気
配を感じて、振り向く。

平太郎　なんや気配がする。どこやろ？

平太郎、社の床下を覗く。同時に稲妻。平太郎、
うわーと叫び声を挙げて、後ろにひっくり返る。

作造　（舞台下手）何や、どないしたんや平やん。

平太郎、床下を指さしたまま、立ち上がれない。
作造、平太郎の横に駆け寄る。

作造 なんかいってるんか、平やん。

平太郎 みいさんや、みいさんが鎌首あげて、真つ
赤な目をして、わしをじっと見てるんや。血の
涙流してる。かんにんや、かんにんや。

暗転

二

床机に平太郎、作造下手から現れ、平太郎の横に
腰かける。蝉の声。

平太郎 今日も石切さん行ってきたんか？

作造 鳩と遊んで、お百度踏む人見て、いつもおん
なじような景色やけど、毎日が違う。一時でも
同じものはないんやなあ。絶えず流れていく。

平太郎 そういうたら、長屋を潰すんやて。

作造 息子がビルにする言うてきかんのや。ごめん
な平やん。

平太郎　　しゃない、時代やさかい。

平太郎　　大道芸人ばかりが住んどった長屋。地の人は、五目長屋言うた。色とりどりいろんな芸人がおったさかい。

作造　　正月に、似顔絵かいて、いっこも似てへんやないか言うて、客に下駄で殴られた奴おったなあ。

平太郎　　おった、おった。頭から血い出して、それでも、へらへらわろとった。

作造　　えらかったなあ、あいつ。

平太郎　　それに、紙芝居の谷やん。

作造　　あんた、ええ年して、子供に混じってよう見とったなあ。

平太郎　　谷やんが紙芝居しながら売とったヌキ覚えてるか、作やん。

作造　　平ぺったい飴で、瓢箪の形が描いてある。それを嘗めて瓢箪を抜く。一番難しいのは瓢箪のくびれ、それに外側も割ったらあかん。上手いこと抜けたら、もう一枚。べとべとの飴、掌にのせて、おっちゃん抜けたでえ。

平太郎　ヌキを嘗めながら、紙芝居見とつたら、谷
やんが突然、わあっと大声あげる。あっちゃ、
こつちやで、びっくりして飴かむ音が、バリバ
リ……、バリバリ……。

作造　こつちも、生活かかっているもんなあ。紙芝居
がおもろないほど、瓢箪はようけ抜かれる言う
とつた。

平太郎　いろんな奴おつたなあ。

作造　うん、いろんな奴おつた。あいつらどうして
るんやろ。生きとるんやろか。

平太郎　猿回しのあいつは、猿が死んだ次の朝、生
駒山に代わりを探しにいく言うて出たまま、帰
ってこえへんし……。

作造　そういうたら、猿が死んだとき、自分の首に
輪っか作って、作やん、この紐持って、わし回
して、あいつの気持ちを知りたいんや言うて、
子供みために、わあわあ泣きよつた。

(間)

平太郎 一人消え、二人消え、

作造 いつの間にか、わしらだけになってしまった。

川の音。

作造 音川の音も、年々、小さく聞こえる。ほんで、

そのうち聞こえんようになるんやろなあ。

平太郎 そうや、誰の一生も、一時（いつとき）の

川の流れや。

作造 やがて、何もない海に出る。

平太郎 一回生まれたら、天子さんでもわしらでも、

一回死ぬ。

作造 ほんま、神さんえこひきないなあ。

（間）

作造 平やん、胡蝶はんてほんまにいたんやろか

平太郎 えっ、どうしたんや急に。

作造 幻やったん違うやろか？

平太郎 そんな事言うたら、みんな幻や。

作造 川を見とうなつた。一緒にいこか。

作造、平太郎、舞台から、観客席に降りる。作造、足を止める。

平太郎 どないしたん作やん。

作造 わしも、胡蝶はんを金で抱いた男の一人や。

平太郎 急に何を言うねん。

作造 あんたと、胡蝶はんの話してから、なんべんもそう思うんや。

平太郎 誰も、そんな綺麗な人間はいてへん。わしもあの夜、胡蝶はんを抱いた人と一緒や。もう、自分をせめんと忘れ、みんな、昔の事や。

作造 いいや違う、反対なんや。忘れとうないんや。金出して、抱いても、猫真似の男に間違えられてても、それはそれでええ。わしは、胡蝶が好きやった。あれは、夢のような一時やった。胡蝶は、わしの腕の中で、何回も、声をあげてくれはつた。

平太郎 そうか、そやったんか。せやけど悲しい恋

やなあ。

作造 影法師みたいな恋や。せやけど一番辛かったは、みんながおさい銭言うてたように、胡蝶はんの後ろ帯に金挟んだときや。

客席中央で、二人並んで、舞台を見上げる。

平太郎 こうやって、音川を見てると、あの夜を思い出すなあ。音川はあの日も、今も、きれいな音たてて、流れて行く。

作造 あの日、二人で幻を見たんやろか？

平太郎 せやけど、美しい幻やったなあ。

作造 あんたが桜井で、わしが大阪からの帰り、近鉄の踏切でばったりおおたんやったなあ。

ライトで舞台に川の流れ。客席の二人のスポットは消える。又、観客席に二人が現れる。

平太郎 蒸し暑いなあ、作やん。大阪はどうやった？

作造 あかん、あかん、途中で雨にまで降られてわ
やや。蝦蟇の油より、オロナインの方がよう効
くでえてやじられて、

平太郎 演歌師もあかん。高校三年生ひいて言われ
ても、わし、しらんがな。バイオリンの弦で、
又、顔ひいてしもた。

作造 わしらの商売も先長ないなあ。

平太郎 なんやしらんテンポがあわんようになって
きたなあ。

作造 ほな一緒にいのか。

舞台に向かって歩き出す。そして、作造立ち止ま
る。

平太郎 どないしたん、作やん。

作造 川ん中に誰か居る。

平太郎 何処や。

作造 ほら、あそこや、ぼんやりと光ってるやろ。

平太郎 なんや、蛍やないか、それもようけ群れて
る。

作造 蛍か……。

胡蝶（声） ほ、ほ、ほたるこい、

平太郎 いや、胡蝶はんや、すっぱだから水を浴びてる。

胡蝶（声） あっちのみずはにがいぞ。

作造 見たらあかん、

胡蝶（声） ほ、ほ、ほたるこい。こっちのみずは

あまいぞ。

平太郎 胡蝶はんの体を包むように蛍が……。

作造 きれいなあ、（平太郎の前に立つ）せやけど見たらあかん。

平太郎 （指をさす）蛍が、胡蝶はんが……。

作造 振り返る。舞台に、小さな光の点が乱舞し、その中に胡蝶の裸身が浮かび上がる。やがてそれは、光の白い帯になり、川を遡る。

作造 胡蝶はんが、みいさんになった。

平太郎 真っ白い蛇になって、音川を上がって行く。

作造 行ったらあかん、胡蝶はん、行ったらあかん。

駆け出そうとする作造、袖をひく平太郎。

平太郎 行かしたり作やん、ここにおっても、しゃないやないか、作やん。

作造 いやや、行ったらあかん。わしのためにだけでも、おって。

平太郎を振り払って、作造舞台に駆け上がる。平太郎、後に続く。暗転。

(間)

闇の中で、胡蝶の声、一番最初の科白と全く同じ。

胡蝶のときめいた声。

胡蝶 来はった。

―幕―

作品 2

バスが行く

[目次へ](#)

登場人物

ゆめ

うた

平三郎

音吉

運転手

幸助

孝之

六目（ろくめ）さん

おゆう

秀雄

風やん

おきよ

旅役者（男）

旅役者（女1）

旅役者（女2）

旅役者（子供）

警官（1）

警官（2）

算盤隊

通勤客

城東館の支配人

司会者

孝之を送る人々

城東館の客

背後の声

母の声

子供の声

うた（少女の頃）

舞台中央の奥が少し高くなっている。劇中、バスの中、ステージ、家、その他と場面に応じて設定が切り替わる。黒い幕で開閉できるように。この空間を以後は、『奥』と

略す。それ以外は、椅子、机などの簡単な装置。西暦2045年。現代（一九九五）より約五十年後。

『奥』（ポリスポックス）で若い警官（1）がコンピューターのキーを叩いている。時々風の音が混じる。

警官（1） 西暦2045年。二月十一日。大阪城西の丸公園の鳩三十匹。昨日より二匹減。行き倒れの凍死者本日なし。あ、まちごた。いたはった、約一名。約はおかしいな、一名と。ビルの屋上からのパラシュート降下遊び五件。罰金として一件につき十万円、計五十万円徴収。うち二名は突風にあおられ転落死。処理料、一件につき二十万円。計、五十万、あ、また、まちごた。（指を広げて勘定する）ええっと、四十万円追加徴収する。落とし物人工眼球二個。ダッチワイフ五体。夢の缶詰一個。（観客の方をみる）。夢の缶詰て、なんやて？ 説明するより、想像するほうが楽しいのたちがう？ ヒントでヒント、二十一世紀に売って

ま。よいしょと、警察日誌はこんでええやろ。

年配の警官（2） 登場。警官（1）はポリ
スボックスから出てくる。

警官（2） （敬礼をして）ご苦労うさん。

日誌書けたら交替しようか。（空を見上げる）あ
あ、また、飽きもせんとビルの壁を上がって行き
よるなあ。

警官（1） 過疎の都会に遊びに来てくれるんはえ
えけど、落ちんといて欲しいなあ後の始末が大変や。

警官（2） 郊外で、年金で気楽にくらしてたらえ
えのに。

警官（1） 年金生活者、失業者、浮浪者、警官以
外に一体、誰が働いてまんのやろ？

警官（2） 地下十階ぐらいまで、警らに降りて行
ったら、かすかにゴーという音してるやろ。

警官（1） 変な音してますなあ。

警官（2） きっと、あれが四六時中働いとるんや
ろ。

警官（1） （警官（2）と肩を並べて空を見る）

ほんまに、大きなジャングルジムですね。

警官（2） 生きる目的失のた大人が命がけで遊んでるんかいな。

警官（1） 先輩は生きてる目的ってあります？

警官（2） ……。

警官（1） 生きてる目的ちゅうのがなかったら、生きてたらあかんのやるか？ なんや、肩身の狭い気するなあ。

下手から、一様に黒いフードつきのコートに身を包んだゆめ、うた、平三郎、音吉が、よたよたしながら登場。舞台中央で、固まって客席の方をポーと眺める。

警官（1） あのら、あそこで何してるんやろ？。

警官（2） バスを待ったはるんや。

警官（1） バス……。

警官（2） 浮見町、長老会の人や。

警官（１） えらい年の人やなあ。みんな百才いつ
てるみたいや。

警官（２） 温うなったら、毎日、来はる。お堀の
そばで大阪城眺めて、弁当食べて、四方山話を思
い切りして、あそこで、ちよつとの間来る筈ない
バス待って、明日来うへんだら笑うたってやあて
歌いながら、帰らはる。今日集まったはんのは、
特別な日やからやろ。

警官（１） 特別？

警官（２） 建国記念日やがな。

警官（１） アツハ……。

警官（２） おかしいか？

警官（１） いいや、別に……。それにしてもバス
やて。

警官（２） 昔はここに電車が走ってたんや。わし
はまだ生まれてへんけど。

警官（１） 電車、地面に電車。えらい不合理や。

警官（２） この坂をチンチン発車しまーす言うて、
ゆっくりと坂を上がって行く姿は、大きなカブト
虫みたいやっただて大阪今昔物語に書いたある。電

車が廃止されてバスや。バスはわしも覚えている。浮見町は大阪の真ん中にあるのに地下鉄や電鉄の駅から便利が悪うて、長い間バスだけが頼りやったんや。

警官（1）　ほんで、ボケた年寄りはまだバスがくる思うて待ってますんか。

警官（2）　バスを待ついうんは、あの人らにとつて、遠い昔を思う事なんやろ。それに、一つの儀式のようなもんなんやろなあ。それがボケてる言われるんやったら、そうかもしれへんけど……。

警官（1）　もう直ぐあの世に行く人の生きてる目的ちゆうのはなんやろ？　聞いてみよかなあ。

警官（2）　喋るこっちゃ、笑うこっちゃ、泣くこっちゃ、そない言わはるに決まってる。

警官（1）　……。

警官（2）　滅多に帰らへんけど、わしも、浮見町の出や。後五十年もしたら、わしもあないして、バス待ってるかもしれへん。（警官（1）を見て）あんたらは、何を待つんや？

警官（1）　……。ほな、引き継ぎしましよか。

警官二人ポリスボックスの中に消える

四人舞台中央、前にでる。

ゆめ あっ、見てみ、鬼がいるわ。

平三郎 石垣の上に座ってこっち見とる。

ゆめ 鬼が見えるときは運がええんよ。

平三郎 苦しまん、コロツと、死ねまつか。

ゆめ 鬼は、年寄りが見る幻なんやろか。人の心を

映す鏡や言う人もいる。

音吉 わしは、鬼なんか見たない。

うた バスはまだかいな。冬は寒いと決まっているのに、日溜まりはほかほかぬくうて眠となる。

うたが座り込み、こっくり、こっくりとふ

ねをこぎ始める。

ゆめ うちもはよ去い、おこたで寝よ。(手を合

わせて) 今日も一日生かしてもうてありがとさん

でございます。

平三郎 まだ一日おわってへんで、いつなんどき、
コテつといくやら分からへんがな。せやけど、去い
にとうないなあ、去んでも、邪魔者やし。嫁はい
けずするし。ひ孫は、昼寝してるわしの頭の毛を
抜きよるし。

ゆめ 抜くような毛おまんのか。

平三郎 (フードをとる) なにいうてんねん、ここ
に、四五本おまつしやろ。

ゆめ ああ、ほんまや。

平三郎の頭の毛をゆめ一本素早く抜く。

平三郎 あいた、こらばばあ、わいの毛返せ。

ゆめ、毛をふーと吹き飛ばす。

平三郎 あああ、貴重な一本が消えてしもた。

四人、黙って客席の方を見る。突然、オナ
ラの音。

ゆめ かなんなあ、また、音さんや。くさい、くさい。
い。

平三郎 うちの嫁の屁もほんまに臭い。

音吉 うちのタマの屁も臭い。

平三郎 タマて猫の……。

音吉 そうや。

平三郎 猫に屁かまされたんかいな。

音吉 こたつでうとうとしとったら、鼻先でプス。

臭いのなんので、あいつら野菜たべへんよつて。

ゆめ 平さんとこの嫁とどつちが臭い。

音吉 そら、比べてみな分からへんわな。うちのタマもって行きまひよか、それとも、そつちの嫁は
んもってきはりまつか

ゆめ しょうもな。音さんは、こんな話ばかり。

音吉 ああ、そうや、みんなに今日は、今日は話そ
思うて、忘れてたわ。わしタマに小便かけられま
してん。

平三郎 また、タマかいな、猫に小便やて。

音吉 な、な、珍しいやろ。タローが。

ゆめ 十年飼うてて、いまだに飼い主に吠える隣の
犬の名前やなあ。

音吉 そうや、そのタローや……（絶句）

平三郎 タマに小便かけられた話や。

音吉 せやせや、タローがタマを追いかけてん。
タマは必死になって逃げて、それでも、あの阿呆
のタローお家^{いえ}まで上がりよって、タマは壁をダ
ーと駆け上がって、窓に飛びつきよったと思った
ら、ジャーと。

平三郎 何でそれがおまはんに？

音吉 わし、その下で口開けて寝てましてん。平三
郎 ……。

音吉 世の中広しと言えども、猫に小便かけられた
んは、わしぐらいのもんやおまへんやろか。いま
で百年何んも自慢できるもんはおまへんだけど、
これだけは、他のもんには真似でけへんで

ゆめ・平三郎 しょうもない。

ゆめ あれ、あれ、しょうもない話ばかりするよ
って、うちちゃん寝てもうたやん。

平三郎 バスもきやへんらしいし、ほな、いつもの

歌うたいながら、ぼち、ぼち去のか。

ゆめ 帰るで、うたちちゃん。

ゆめ、うたの肩を揺する。うた大きくのびをする。平三郎、音吉下手にゆっくりと歩きながら歌う。その後ろから、ゆめが続いて歌う。

平三郎・音吉・ゆめ 明日来うへんだらわるたつ

てや、ええとこ行きよつたいうて、わろたつてや、向こうへ行ったら、みなによろしゆうゆうといて、その内わしらも行くよつて

うた ゆっくりと立ち上がる。

うた (客席の方を見ながら、目をこすり) あれえ、バスがきよつた。まだ、夢みてるんやろか? 陽炎がたつてる。その中をバスが揺れるようにして、やって来よる。ほら、ほら(客席に向かって指を差す)。

ゆめ 陽炎やて、阿呆な、この寒空に……せやけど、
ほんまや、ほんまや、バスがくる。

バスの音が段々近づいてくる。全員呆然と
してバスを待つ。

バスが停まる音。『奥』（バス）に、平三
郎、音吉、ゆめが乗り込む。下手に運転手
が背中を向けて腰掛けている。

平三郎 浮見町まで、四人。みんな、老人パス見せ
や。生きているうちにバスに乗れるやなんて思い
もせえへんだ。

ゆめ うちはパスや、顔見たらわかるやろ。えらい
年寄りの運転手さんやなあ、大丈夫かいな。

平三郎 （大きな声で）浮見町まで、じじい二人に、
ばばあ二人。

運転手 へーい、始めから終わりまで、みんな浮見
町や。

ゆめ なに言うてんのやろ？

運転手 発車！！！！

平三郎 ちょっと待って、うたちちゃんなにしてるん

やはよ乗らんかいな。なんぎやなあ、ほんまに。

自分が乗るのを忘れて、外で手ふってるがな

平三郎、うたの手を引き、バスに乗せる。

ゆめ グズ

うた (即座にうたの顔を見上げて) ブス。

バスの扉の締まる音。

ゆめ うちは窓際がええ。

音吉 (床に座り込む) わしは、床にへたったほうがええ。

うた うちは、一番後ろのひろーくて、なががい
席がええ。バスの揺れに合わせてひと眠りしよお
おと。

バスが動きだす音。

ゆめ バス乗んの何年ぶりやろ

平三郎 高校の一年は電車で後二年はバスやった。

ゆめ お堀の近くの有名高校？

平三郎 いや、もうちょつと向こう。言わさんときいな。

ゆめ あ、大阪城の天守閣に夕日が落ちて行く。きれいやなあ

うた ビルの谷間のお城はほんまにかわいそうなくらい小さいわ

ゆめ あれ、うちら何処から大阪城を見てるんやろ？

平三郎 なんやよう見たとこやと思たら、浮見町に帰って来てるがな、乗ったと思うたら、もう降りな。

運転手 お降りの時は、ボタンを押してください。うた いやや、もつと、乗ってたい。いままで、何日待ったと思てんの。

ゆめ、音吉 せや、せや。

平三郎 そんなむちやな、浮見町を通り抜けてしま

うがな。

運転手 終点まで行っても、浮見町や。

音吉 そういうたら、町内をぐるぐる回っているみ

たいやなあ、このバス。

運転手 浮見町巡回バスです。

平三郎 それやったら、安心や、小さい町やよって、

何処で降りても直ぐに帰れる

平三郎、窓から外（客席の方）を見る。

平三郎 都市の中の過疎の町か、四十年前は考えら

れへんだことや。何で、こんな事になってもた

んやろ

ゆめ、窓（客席と反対の）に張りつくよう

に外を見ている。時々首を傾げる。

音吉 ドーナツ現象や言うてた。ほんで、真ん中が

空なんやて。

平三郎 最初に道路がパンクしてしもた。なんぼ、

電波が発達しても、物が滞ったら、なんもならへん。

音吉 えらい罰金とって、市内の自家用車乗り入れ禁止。あのへんから、みんな、都市から、ちよつとずつ離れて行きよつた

平三郎 人が集まるから都会や、それがのうなつたら、空気は汚いし、やかましいし、住みにくい場所や。それに、在宅勤務者の増加。

音吉 平さんもせやつたんやろ？

平三郎 定年までの十年ほどそやつた。在宅勤務いうより、在宅失業者いうた方が当たつたと思うわ。

音吉 それでも、給料貰えるだけええわ。わしら、商売はいっぺんにあかんようになった。

平三郎 一昔前は窓際いうたけど、わしらは窓もなかった。することないから、町内をぐるぐるジョギングばかりしとつた。

うた ほら、あのビルの上に、旧式のパラシュートつけて、ほら、飛んだ。命かけてなんであんな阿呆な事するんやろ。何であんなに死に急ぐんやろ。

(ゆめに話かける) ゆめちゃん、なんか面白いも
んでもあるの？

ゆめ返事をしない。おくり景色に合わせて、
顔を動かす。

運転手 今日の新開に、ホツカホツカカイロ一個で
殺人とありましたなあ。

平三郎 よつぽど寒かったんやろ。せやけど、あん
なんもん慈善協会が撒くからいかんのや。やらへ
んだら、誰も欲しい言わへんやろに。

音吉 静かに凍え死んでいきますか。

平三郎 (ボツソリと) そんな意味やないけど……。

運転手 この間のドドド、舌まわらへんがな、テレ
ビのドキュメンタリーで大阪府が撒く高カロリー
パンも余計なお世話やいうてましたなあ。

うた、ゆめのそばに行つて、顔を並べる。

運転手 そのドキュメンタリーで、行き倒れの死体

から、人工臓器を回収する府の職員の姿映してま
したなあ。わしの身体にも二三個入ってるし、自
前の胃や腸より愛着感じる。それが又、他人の身
体の中で動くと思たら、なんや、嬉しいような、
さみしいような……。

平三郎 (ゆめ、うたの方を見て) なんか面白いも
んでもあるんかいな。

ゆめ な、おかしいやろ。

うた そう言うたら、そうやなあ。

ゆめ たしか、去年、山田はんは、息子とこへ行っ
た筈や。

うた そうや、そうや、今は誰もいてへん筈や。

ゆめ もう直ぐやよって、よう見てみ。

四人が窓に顔を寄せる。

ゆめ ほら、やっぱりや。

平三郎、音吉 なにが？

うた ほんまや、見えたわ、洗濯もんが干したった。

平三郎 帰ってきたんやろう。ドーナツの実の方も

大変らしいよって。

ゆめ （独り言のように）せやけど不思議やなあ、さっき、お日さんが沈んだのにいっこも町はくろうならへん。それに、何年か前の浮見町を見ているような気がするし。うちの目がおかしいんやろか？

うた あれえ、うち、なんか、若がえったみたいや、皺が一本のびた気がするわ（うた、顔に手をやる）。

バスが止まる。ドアの開く音。幸助がバスに乗ってくる。

幸助 こんばんわ、あら、あら、みなさん、おそろいで。

平三郎 幸さん、何処へ。

幸助 いや、ちよっと。

幸助 一番後ろの隅に腰を下ろす。うた、幸助と一緒に後ろの席へ行く。

音吉 あいかわらずやなあ幸さん。若い頃から無口や。黙々と自転車の修理してはったもんな。

平三郎 それに、意外におしゃれや、作業服が油で汚れているようなことはあらへなんだ。丸がりで、何時も、ジャイアンの野球帽かぶとつた。そういうたら、葬式の写真も野球帽かぶとつたなあ。わしが酔うて、からんで、タイガースのなにかあ……。

ゆめ、平三郎の顔を覗き込む。うたは幸助にさかんに話しかけて、楽しそうに笑っている。

うた いややわ、幸助はんの助は助平の助や。

幸助 えへ、そんな……。

音吉 せや、せや、町内であいつだけがジャイアンツや。ジャイアンの勝った晩、自転車屋の表を通ると、小さい音痴な声で、お経みたいな巨人の星歌うてやがった。自転車のチューブ水につけながら、思い込んだら、試練の道を……。

平三郎 あのかなあ、音やん……。

音吉 (平三郎を無視して) 夜伽に、供養になるいうて、いややったけど皆で巨人の星を歌わされたなあ。

平三郎 夜伽やろ、音やん……。

音吉 (平三郎を無視して続ける) それに、葬式の日には、息子さんがなあ、他の人に見せたら、破られたら困るから、温厚で優しい、そして教養の溢れる音吉さんにだけ見てもらおうて、古い茶色のペラペラの封筒を見せますんや、それに汚い字で、たからものと書いたんね。何んやと思う？。ボロボロになつとつたけど、長嶋のサインやった。そう言うたら、わしらも昔ジャイアンツファンやつたんやなあ。小学生のころ、あんたと背番号3を取りあいしたもんなあ。それが、何時の間にか、タイガースや、あれから、強い奴に随分いじめられもんなあ。

平三郎 よう喋りよつたなあ、とりあえず今とは関係ないことを。

ゆめ それに、夜伽や葬式やいうて、なんにも思わ

へんねやろか。

音吉 思わへん…。

平三郎 あそこにいるのん誰や？

音吉 誰やて、幸さんやがな。

ゆめ 誰の葬式の話してたん。

音吉 幸さんや、ありや…。

平三郎 (声を潜めて) ゆうれいや。

ゆめ いや、違う。このバスがおかしいんや。町の様子が少しずつ変わって行く。ほら、あのローソンは去年店閉めたはずや。信屋先生は医院を辞めはったはずやのに、看板が昔のままや。ちよつとずつ昔に帰っていく。信じられへんけど、バスは時間を遡ってるんや。みんな、降りよ、何処へ連れて行かれるか分からへんよ。

運転手 降りたら、二度と乗られしまへんで。

ゆめ 降りたらどうなんの？

運転手 どこで降りても浮見町や。せやけど、バスは二度とはこうへんと思う。そんな気がする

バスのとまる音。幸助がドアに向かって

歩いてくる。

幸助　どなたはんも、お先に。

三人、幸助の動きをずーと目で追う。うた、後ろの席から移動。ドアの締まる音。又、バスが動きだす。

うた　ほんまに久しぶりやった。(不思議そうに皆の顔を見て) みんなでないしたん？ (少し間をおいて) ああ、おかしい、平さんの頭、又、髪の毛増えてるわ。

ゆめ、音吉、運転手、一斉に平三郎の頭を見る。平三郎、キョトンとした顔をした後、頭に手をやる。そして、丁寧に髪の毛を一本ずつ勘定する。

平三郎　(弾んだこえで) わし、しばらく、このバス乗ってるわ。

暗転。バスの音。舞台薄暗く。

うた 時間を遡るバスなんやて。ほな、終点でお母ちゃんに会える。

音吉 ふん、お母ちゃんの顔も知らんくせに。その前に恋しい清次に会えるわ。

うた あんな奴に会いたない。

西暦 2020年。上手に男、女二人、子供（男）。女（1）は赤ん坊を背負っている。女（2）は、公園の洗い場の水道で食器を洗っている。男は、こんろで煮物をしている。子供は地面に絵を描いている。

ゆめ やつと夜になった。

うた あの人ら、誰やろ？

平三郎 覚えてる、覚えてる、なあ、音やん。

音吉 旅の役者や。いつのまにか、公園にいついてしもて、困ったことやった。

平三郎 だあれも、面と向かって文句よういわんよ

って、わしが行ってん。

音吉 あんた、町内会の会長やった。

平三郎 あんたは副会長。

音吉 会長たてて、わしは行かへんだ。

平三郎 ほんまに、よう言うわ、調子のええことば
っかり……。ほんで、勇気だして行ったら、話は
簡単についてしもた。町の人にそない迷惑かけて
た思わへんだ。すぐにでも、引きあげさしてもら
います。その前に、迷惑かけてこんなこと言うの
も心苦しいが、一回だけ興行させてもらわれへん
やろか、もう、どこにも芝居するところあらへん、
これが最後やと思うからという事やった。

音吉 「風の一座」いうてた。わしら七十五六やつ
た。七十代の顔になつたかいな？

平三郎 なつた、なつた、八十前の鼻たれ小僧や。

音吉 あんたも、真っ白やった眉毛が黒うなつてき
たわ。

平三郎 あの晩は、六ろくめ目さんの葬式済まして行った
んやったなあ。葬式は、バサパサの煎餅みたいに、
全然湿ってへんだ。

音吉 わしとあんただけの葬式やった。

平三郎 六目さんは身体を殆ど機械に変えてたから、機械が故障したんか、六目さんが死んだんかよう分からんだ。

音吉 府の職員が来て、機械を回収して、ローソクの火をふっと消して、葬式は終わりやもん。外に出たとたん、稲妻が走って、雷が鳴った。あんたは、六目さんが、機械持って行かれて、わしの身体返せ言うてるみたいや言うたなあ。それにしても、よう、分からん、六目さんって、一体、何もんやったんやろ？

平三郎 府の職員があの人には国民番号がない、言うてた。

音吉 代わりにあるんは、菊の模様やて。

平三郎 浮見町に天皇陛下がいたはった……。まさか。

音吉 わし、よう回覧板持っていったもんなあ。

暗転。『奥』に幕。稲妻が走る。激しい雷

鳴。下手から平三郎、音吉が出てくる。

音吉 えらい天気やなあ。悪いけど、わし、帰りま
っせ。

平三郎 なに言うてんねん。芝居や芝居。

音吉 約束しはったんは、あんたさんやから。町内
会の会則に葬儀は手伝うと書いたるけど、芝居を
見なあかんとは書いてへん。

平三郎 ええもんあるんやけどなあ。

また、稲妻が走る。

音吉 はよ去なな、雨がきよる。

平三郎 これなんやと思う？ （ポケットからカッ
プ酒と煙草を取り出す）

音吉 菊正とロングピース。そんなもん、なんも珍
しいことあらへん。

平三郎 1900年代のものや。

音吉 そんな肺癌になったり、悪酔いするようなも
んいらんわ。

平三郎 さよか、せやったらええわ、さいなら。

音吉 （平三郎の袖をひっぱる）ちよつと、待って、
ほんまもんかいな？。

平三郎 まあ、悪酔いしてはじめて分かるやろ。あ
んたの店には売ってへんわなあ。

音吉 あっ、降ってきよった。

雨の音。雷鳴。

平三郎 （音吉の手を引つ張る）さあ、はよ、入ろ。

平三郎 だあれもいてへん。

音吉 今時、芝居なんてなあ。大きなテレビもある
し、気が向いたら、自分も参加できる劇もあるし。

平三郎 まあ、文句言わんと、つきおうてえな。

（酒をつぐ）まだ。なんぼでもあるんやから、
（あちこちのポケットから、何本もカップ酒を取
り出す）。

音吉 ほんま、あんたのポケット、養老の滝やなあ。

平三郎 煙草も吸い。

音吉 おおきに、せやけど、ええんやろか。

平三郎 灰皿あるから、かまへん。それにしても、
誰もこんなあ。こんな天気やし、しゃないなあ。

これつまみにして（服の裏から弁当を出す）。

音吉 なんでも出てくる服やなあ、今度は小遣い出
して。

平三郎 それはおまへん。

音吉 なんか、楽しゆうなってきたなあ。酒も旨い
し、煙草も旨い。ねえちゃんはおらんかいな……。
そら贅沢やとして、今の酒や煙草は、無害で、味
も香りも昔のんと全くいっしよやいうけど、何ん
かがやっぱりちやう。

平三郎 そや、楽しみいうんは必ず、ちよつとは毒
含んでるもんなんや。

稲妻が舞台の幕に走る。雷鳴。激しい雨の
音。柝が入る。幕がゆつくりと上がる。国
定忠治、赤城山の場。

忠治 （刀を見上げる）赤城の山も今夜限りか。か
わいい子分のおめえたちとも、別れ別れになる身

空だ。

平三郎 劇の劇は劇薬の劇やで。

音吉 せや、夢には覚めるといふ毒がある。

平三郎 覚めない夢は？

音吉 見ることがでけへんか、永遠に見続けな、しやない。

笛の音が入る。

忠治 雁も西の空に飛んで行かあ。

子分 親分。

平三郎 日本一！

音吉 大統領！

また、稲妻が光る。そして、六目さんの巨大な影が浮かぶ。

音吉 あっ、六目さんや。冥途から帰ってきはった。

六目 身体の殆どを機械に置き換えられて、それでも生き続けるということは辛い事だった。もし、

心というものがあるのなら、それはいつも夢の中をさま迷っていた。夢の中でしか生きられなかった。

影が忠治の方を向く。

六目 （しぼりだすように） よおおおう……日本

一！

幕が一気に降りる。同時に影も消える。平

三郎、音吉、舞台にかけより、幕を上げる。

平三郎 誰もいてへん、誰もいてへん……。

音吉 うつ、気分が悪うなってきた。きたきたきた、きよった、長い間忘れてた悪酔いがきよった。

平三郎、舞台の中央で、（忠治のように）

刀をかざす。そして、六方を踏む。

音吉 （舞台に座りこみ） よお、へいざぶろう！

暗転。平三郎、音吉、座り込んでいる。

平三郎 わしな、長いこと生きてきて、今だに自分の顔知らんような気がする。

音吉 男前やで、あんた。

平三郎 鏡覗いても、これがお父さんの平三郎や、これが真面目だけが取り柄の經理の平三郎や、これが人のええ浮見町の平さんや。いろいろ思てるうちに、自分の顔がどんなんや、分からんようになりよる。

音吉 みんな、あんたや。

平三郎 自分やないとあかんという事がないような……。

音吉 大学出はむつかしいことを言う。わしら、何回鏡見ても、酒屋の音吉や。

平三郎 なあ、音やん。

音吉 はあ。

平三郎 あの時、六目さん、生まれて初めて、腹の底から、自分の声出したんとちがうやろか？

音吉 死んで初めて自分の声が出せるか……。 (少

し間をおいて) よおーーー

平三郎 日本一。

バスの場面に戻る。上手に孝之さんの銅像。雪がちらほら舞っている。きよ子、下手から登場。銅像の周りを掃除しはじめる。登場人物は若返っている。

運転手 この辺りは四丁目。浮見町の真ん中ですか？ ちよつと車止めよ。

ゆめ (掌をじつと見ながら) 少しずつ皺が伸びていく。あれ、うたちちゃん、きよ子がいるわ。

うた あつ、ほんまや。今朝、大阪城へ来るときも嫌味いわれたんや。

ゆめ なんて？

うた 年寄りに、寒さは禁物、堀に落ちんようにきいっけなはれやて。

ゆめ そんなん言いながら、ごみをあんたとこの表に掃き出しよるんやろ。

うた ほんまに嫌なやつ。いかず後家。

ゆめ ちゃうちゃう、あれはいけず、行きとうても
行かれへんちゆう意味のいけず後家や。

うた あんな根性やったら、男はよってこんわ。そ
れに不細工やしええとこなしや。

ゆめ せやけど、なんで、孝之さんの銅像の掃除し
てるんやろ。いつもは町内の事なんにもせえへん
のに。

運転手 ほお、あれが、孝之さんの銅像でつか。

平三郎 浮見町でたった一つの観光資源や。

ゆめ 二十一世紀の最初の戦争の、日本でたった一
人の戦死やもん。

平三郎 あの際は町中が熱に浮かされたみたいやつ
た。

うた ほんま、えらい騒ぎやった。日本から国連平
和軍に参加して、異国で倒れた、若き英雄いうて、
テレビや新聞がようけ来た。

音吉 泣かなあかん親父さんが、まちごて、カメラ
に向かって、ピースってやったもんなあ。

銅像が肩の雪を払って、壇から降りてきて。

バスに向かって手を上げる。

運転手　へい、すぐ開けるよって。

四人声を揃える。　孝之さん？？？

平三郎　こら矛盾や。銅像が立ってるのに。

孝之　ゆうれいや、僕。

うた　きやあ、おばけ！

孝之　大きな車やなあ思て、中見たら、うたばあ見えたよって、なつかしうて。

うた　こんな若うなっても、まだ、ばあさんか。まあ、ええわ。このバスもおばけみたいなもんやから、おばけが出てもびつくりすることないわ

運転手　これが英雄でつか。ちよっと間が抜けてるみたいやけど。

ゆめ　小ちゃい頃は、野球帽反対に被って、箒かっいで、パンパン口でいうて、大通りはよう走らんで、路地をばっかり走とった気の小さい阿呆や。孝之　なんや、ゆめばあもおったんかいな。降りよかなあ。

運転手　新聞には、小学、中学、高校を首席で卒業、

東大に入学て書いたったけど……。

孝之 東大の横に小さい字で予科と書いたらしませ
んでした？

運転手 予科？

ゆめ 予備校のこつちやろ。

孝之 なんや馬鹿にされるために車に乗ったみたい
や。降りよ

平三郎 まあまあ、こつちへおいで。ほんで、また、
なんで迷たはりまんの？

孝之 なんでかしらん、このへんうろろしてます
ね。ただ、あの銅像を見るんがつろうて。

うた なんで？ あんたは町内の英雄やで。音さん
なんか、サインしてもらお思て、ポケットひっく
り返してるやんか。

音吉 あった、あった、（くしゃくしゃの紙を出
す）鼻紙しかないけど。

孝之 サインやなんてとんでもあらへん。本当の話
きいたら、僕のサインなんか、お尻ふくのにも使
わへんと思う。

平三郎 本当の話？ あんたはあの戦争で名誉の戦

死を……

孝之 嘘や、なにもかも嘘や。死んだちゅうのはほんまやけど。

ゆめ なんか言いたそうやなこの子。聞いたげるから言い。

孝之 町内のみんなに送られて、僕も決死の覚悟やったけど、飛行機に乗ってびっくりした。ファーストクラスやってん。

ゆめ ほな、一般の人と一緒にいな。

孝之 そうや、修学旅行の女子高校生と一緒にやった。手が痛なるほどサインした。日本からの志願兵は五十人ぐらいやった。みんな、不安そうな顔してた。いちびってこんときやよかった言うて愚痴こぼす奴もおったし、女の子の志願兵に、ぼくまだ童貞です、死ぬ前に一回させていうて泣きついてる奴もおったし、ずっと窓の外見ながら泣いてる奴、マンガ読んでる奴、サービスのワインで、急性アルコール中毒になった奴、下痢でトイレを占有し続ける奴。夜になると高校生が兵隊さんを慰めに来てくれはった。けなげやるほんまに、せや

のに、皆あかんだ。しゃないからおっぱい吸うてた。ファーストクラスのあっちゃこっちゃで、チュウ、チュウ、チュウ。

音吉 ほら、チュウ、チュウ、チュウ。

孝之 覚えてるわけないけど、おかあちゃんのおっぱいみたいやった。僕とこ来てくれた娘は僕の耳もとで、あんた上手やあって、ほめてくれはった。

平三郎 ほんまに、けなげなんやろか？

音吉 ほら、チュウ、チュウ、チュウ。

孝之 すんません、もう、終わってますねん。

ゆめ とにかく戦場へ行つたわけやね。

孝之 戦場？ そういえば、戦争やったんやなあ。

(間) 戦場なんか、遠い場所やった。後方の後方の、もう一つ後方。危険な物は前の部隊が根こそぎ取りはろうてくれはった。部隊の隊長は口癖みたいに、辛いことあらへんか、欲しいものあらへんかて聞くし、疲れたら、リゾートの島を用意してあるから、何時でもどうぞ。もし、帰りたければ、直ぐに手配します。それに、勲章は今はバーゲンで大変お買い得。

平三郎 えらい、気楽な戦争やなあ。

ゆめ テレビで見た国連平和軍は目がギラギラしてて、気楽そうに見えへんだけど。

うた 服も汚かったし、痩せてた。

孝之 ああ、あれ、あれは国連平和軍とちやう、テレビが間違えよってん。ぼくらはあんまり後ろにいたから、取材班が追い抜いてしもてん。あれは開放軍や。ぼくも大きな望遠鏡で見せてもうたけど、子供みたいな兵隊やった。いいや、みたいとちごて、子供や。

平三郎 あれがほんまの兵士か。

孝之 テレビに映った後、あの部隊全員戦死しやて、アッハ。

平三郎 こら、なにが可笑しいね。

孝之 おこらんでええやん。僕のせいやないんやし。

平三郎 笑いごとやないやろ。

音吉 おこりな平さん。孝之が悪いんと違う、この子らとわしらは何かがずれてるんやから。

平三郎 人間同志、なにもずれるものなんかあらへん。

ゆめ それが、ずれてるんや。

平三郎 ずれてる、ずれてるて、ゴムの切れたパン
ツミたいに言いやがって

孝之 猫や。

音吉 猫の話やったら、わしや。猫に小便……。

ゆめ 音さん、ええかげんにし、猫がどないした
ん？

孝之 女の子が狂て、猫を撃ちよった。せやけど、
猫はにゃんともなかつた。

平三郎 (孝之の頭をポカリとたたく)

ゆめ よういわんわ、猫相手に戦争か。

孝之 ほんで、ぼくらの持つてる弾が本もんちやう
のが分かつた。英語やけど、簡単やったから、そ
の娘が言うた意味が分かつた。きれいな金髪なび
かして、猫も殺せへん戦争てなんやねん、叫びよ
った。

音吉 金髪がなんやねんって言うたんか。

孝之 ほんで、指揮官の銃ひったくって、猫をバー
ン。

音吉 猫が名誉の戦死かいな。

孝之 みんな、銃をほかした。ほんで、三十分後、また、その銃を担いだ。なんやしらん、同じ筈やのに、ほかした銃より重う感じた。

音吉 猫や、猫の亡霊がついたんや。

孝之 その猫を担いで……??？ もう、ややこしいこと言うよって、こんがらがってしもたやん

音吉 ……

孝之 僕、缶けり教せたってん。それをみんな面白がって、朝から晩まで、やった事もあったわ。白いのや、黒いのや、黄色いのが、ちいぢやな空き缶に必死になって……。ほんで、毎日、遊んでいるうちに、ある日、突然、戦争が終わった。

平三郎 終わった？ あんた、死ぬ時あらへんや。

孝之 ジョンちゆう犬みたいな名前のアメリカ人が、地雷を見つけよった。道の真ん中に落ちてたんや。ほんまものと違うのは明かやった。それは、おおきなウンコの形をしとった。おもちゃやとジョンは言いよった。おまけにTOYと書いたあった。孝やれ、ジョンが言うた。それが周りに広がって、みんな集まって、れいのやつを孝やれの大合唱や。

ゆめ 何をやれて？

孝之 ぼく、音痴やし、何にも芸あらへん。パーティーの時、えらい困って、赤のふんどしいっちよで走ったら、それがえらい外人に受けてん。

平三郎 ふんどし、えらいもん持っていっとてんなあ。

孝之 ぼくの趣味やねん。

うた よういわんわ、いやらしい。

音吉 うたちゃん、知ってんの？

うた (かぶりをふる) しらん、しらん。

孝之 バスを降りる。上手でふんどし一つになる。孝之、ヘッドバンドを巻き、日の丸をさす。

孝之 (股をさわり) かわいらしいのが顔だしてへんかを確認してと。(上手から、下手へ走る。)

孝之 天皇陛下万歳。(倒れる)。

平三郎 おもちやの地雷の上に倒れたんか？

孝之 (立ち上がる) ほんで、真っ白になった

音吉　ほんもんやったんかいな。

うた　ぷっ（吹き出す）。

ゆめ　うたちちゃん。

うた　あいた、なんでつねんの。

平三郎　それで、名誉の戦死。

孝之　みんなまだ笑たまんまの顔しとった。顔の筋

肉が直ぐにもどらへんだんやろな。その顔の上に、

ぼくの、肉や、血が、パタパタと落ちよった。

（肩を落としながら、銅像のあつた所を見上げる。）

孝之　りりしいええ顔しとるなあ。ぼく、一生でこ

んな顔したこと一回もなかったやろうなあ。（バ

スの方を見る）みなはん、お願いや。この銅像、

壊して。

平三郎　気にすることあらへん、嘘でもほんまでも、

銅像になったら、みんなおしまいや。事実なんか

なんの意味もあらへん。

孝之、上手から消える。雪が激しく舞い降

りる

運転手 英雄やろうな。とにかく、戦争に行ったんやから。孝之はん恥ずかしがることあらへん。

平三郎 そういうたら、わしらは戦争の知らない子供たち言われた時もあったなあ。

ゆめ それから、団塊の世代。

平三郎 せやけど、いつも勝たないかん言われ続けてきた気がする。

運転手 いつも戦中派でんな、ぼくら。

ゆめ ちようちんの真ん中、数ばっかり多おて。

平三郎 最後までわしは平社員やった。

音吉 そのの方が気楽でええがな。

平三郎 やっぱり、戦争よりはええか。

旗を振る人々に送られて孝之、出征の姿で

上手から登場。

ゆめ あ、孝之さんの出征や。

うた 孝之はん、行ったらあかん。孝之さんがかわ

いそうや。

音吉 わしらが送り出したんやろか？

平三郎 わし、旗振って、万歳言うた。

うた うちも言うた。かんにん。人間ってアホやな

あ、21世紀になっても何もかわってへん。

平三郎 世界正義に踊らされて名誉の戦死。ほんで、

死んだ後も、英雄という名前で、踊れ！、か。む

ごいなあ。

孝之、バスに向かって敬礼をする

孝之、バスに向かって敬礼をする

うた あっ、孝之さんがうちにむこうて、敬礼を

したはる。

音吉 わしらもしたろ。な。

平三郎 ええ顔してるやんか。

ゆめ あれ、おきよがあんなとこで泣いてる。

うた 目にごみでも入ったんやろか。

ゆめ そんなこと言うたりな、可哀想やないの。

バスの中の五人、敬礼を返す。暗転

バスの上手に、上谷^{かみや}が腰掛けて、ぼんやりと送り景色に目をやっている。

運転手 今日とは変わった物見えまっか

上谷 いいや、昨日とおんなじや。

運転手 今日は、大阪城の天守閣に鬼がおりまっせ。

上谷 昨日もおった。おとといもおった。いいや、
ずーとあそこにおる。

音吉 (声を潜めて) 誰や？

平三郎 上谷三郎。

音吉 しらんなあ。

平三郎 大阪市の公務員の人数を半分にした、伝説の人物や。

ゆめ あの人が首切り三郎かいな。

平三郎 最後は自分も合理化されてしもた。

上谷 (突然立ち上がる) 3人かかった仕事を一
人！ 算盤、電卓、書類の追放、システム！ そ
んな考え方は、論理的やない！

バスの止まる音。ドアが開く。観客席五人の男女が算盤を振りながら乗り込んでくる。振る算盤の音。ザツ、ザツ、ザツ

ゆめ なんや、この人ら、みんな片手に算盤もつて。

平三郎 あっ、山本さんやないか。松本主任。有本

課長もいたはる、よう見たらわしもいてる。

男（A） あっ、わしらから仕事奪うた上谷がいる。ザツ、ザツ、ザツ

上谷を取り囲む

男（B） わしらの仕事を返せ。駅の改札口をわしらに返せ。ザツ、ザツ、ザツ

男（C） 面白かった仕事を返せ。ザツ、ザツ、ザツ

女（A） お茶くみの仕事を返せ。ザツ、ザツ

男（A） 算盤を返せ。何年もかかって搦んだ技を返せ。誇りを返せ。ザツ、ザツ

男（B） 家に帰って飲む、一杯のビールの旨さを

返せ。ザッ、ザッ、ザッ

上谷 合理化や、合理化や、（叫ぶ）もう、あんた
らは、みんな、いらんねん、ご破算なんや（算盤
の音、ザッ）

算盤の音一斉に止む。（間）。暗転

うた（声） みんな消えた

上谷にスポットライト。算盤隊が落として
いった、算盤を拾う。そして、振る。ザッ。

暗転。

運転手 二十世紀に入ります

平三郎 新しい世紀か……。えらい大きな区切りや
思うたけど

音吉 水溜り、ポンと飛越える程も、なんも変わら
へんだ

平三郎 なんやこれは。

全員 わあー地震やあ。

ゆめ 阪神大震災や。

音吉 ふっ、やっと収まった。

うた うちらは大したこともなかったけど。神戸は大変やった。

平三郎 みんながんばったもんなあ。二十一世紀に

は、神戸は首都や。

音吉 総理大臣はくじ引きやけど。

明るくなる。次々に人が乗り込んでくる。

(声だけでも可)

平三郎 えらい込んできたなあ。

ゆめ みんな黙って、吊革にしがみついている。

音吉 通勤ラッシュか

男(A) いややなあ、会社行くのん。

うた なんやて、平三郎さん何か言うた。

平三郎 いいや、何も言うてへん。

女(A) もうじき三十や誰か男おらへんやろか。

男(B) 嫁はん、コロツと死んでくれへんかなあ。

男(C) あの女きれいな。

男（B） どっかに金落ちてへんやろか。

男（D） 課長になりたい。

男（E） 浮浪者になりたい。

女（B） 今日もあの人に会える。会社はええわ。

大好きや。毎日が恋愛。

平三郎 わしにも聞こえだした。喧しいなあ。

男（F） 昨日の忘年会で、酒のみ過ぎた。なんも

分からんようになってしもた。へんなことしてへんやろか。会社に行くんが怖い。

男（G） 今晚は、30番行つたら。8、8、タラ、タラ、タラ、8、おめでとうございます、88番ラッキーフイバー。

女（C） 誰、お尻さわるのん。

女（D） 映画でも行こうかなあ、治でも誘お。せやけどあいつ、金持ってへんしなあ。

女（E） この女、昨日餃子食べたな。

ざわめき、一斉に止む。バスの停まる音。

暗転。

音吉 北斗七星が見える。

うた あの大きな柄杓で水汲んで、空は雨を降らす
のや。

音吉 天の川に水汲みに行かはるんやろ。

うた そうや。

音吉 ロマンチックやなあ。時をさかのぼるバスが

銀河を渡っていくようや。

うた あんた似合わないことをいう。

音吉 うたちゃん、あんたは過去で誰に会いたい。

うた 誰って、やっぱりお母さんかなあ。

音吉 お母さん？。

うた 顔もしらんけど……。

音吉 (焦って、話を逸らすように) わしは、わし

は、昔のうたちゃんに会いたい。

うた えっ？なんで。

音吉 なんでやて……。言い忘れたことがあるねん。

うた それやったら、今言うたらええやん。目の前
にいるんやから。

音吉 今はいえへん。まあ、過去に帰っても言えへ
んかもしれんけど。石炭箱逆さまにしてその上に

乗って、げんこつをマイクにして、りんご追分け
歌うてた。

うた (歌う) りんごの花びらが、風に散ったよな
あ……。ゆめちゃん、あんたは誰に会いたい。

ゆめ うるさい。

うた うるさいって……。

ゆめ 誰にも会いとうない。

うた ……。あ、朝日湯の煙突が見える。

ゆめ なつかしいなあ、親子三人で、よう、行った。

あの頃が一番幸せやった。

うた 浮見町の石部金吉いわれるくらい固かった秀

雄さんが何で博打になんか狂たんやろう？

平三郎 酒も呑まへん、気の小さそうな人やったの
に。

ゆめ 人間て、何がきっかけで、ころっと変わって
しまうかわからへん。同僚の先生に誘われて、生
まれて初めてパチンコをしはったんや。

音吉 四十過ぎて初めてパチンコ、えらい人もおる
もんやなあ。

ゆめ それが百円でフィーバー、神さんも、せつし

よなことしはる。ものすごい興奮して帰ってきはった。

うた 年いって、ぐれたら、怖いちゅうもんなあ。

ゆめ 次の日からちよつとずつ、帰りが遅うなつて、来うへんて、学校から電話かかきたりして、そのうち、サラ金が来るようになった。落ちだしたら、速い、ほんまに速いわ。坂道に玉転がすみたいなもんや。そないしてるうちに、ぽいと、おらんようになつた。

下手から秀雄がバスを追い抜いたり、抜かれたりして走っている。

秀雄 あの時分は夢中になるもんが何んもなかつた。

いいや、せやない、子供の頃からなんもなかつた。

秀ちやは、勉強できるよつて先生がええわ、周りから言われて、先生になつたけど、子供がこおおてしやなかつた。年ごろになつて、この娘はんどうや、聞かれて、まあ、自分もちんちくりんやから、これぐらいでええやろ思うて、ゆめを嫁さん

にもろた。

ゆめ ちんちくりんで悪るおましたなあ。

秀雄 なんや、おったんかいな。

ゆめ うちも学校の先生やから間違いないやろ思うた。バブルの真っ最中、三度のご飯が食べられへん家があるやて、信じられる？ 病院のまかないやあって、残ったご飯、人の目盗んでおにぎりにして、家に持って帰って子供と二人で食べたんよ。子供のほっぺたにご飯粒ついたんを、取ってやって、口に入れたら、明日のこと考えんの忘れて、ふっと笑うた。亭主が働いてのんびりしてた頃は味われへんだ幸せやけど。

秀雄 (走るの止める) どんな時も真っ暗はないんやなあ。

ゆめ よう言うわ人ごとみたいに。せやけど、真っ暗や思た事はあったなあ。生きて行くのが嫌になつて、子供の手引いて、線路の上歩いたんや。もう、どうなってもええ氣いして。せやけど、なんやしらん、急に腹がたってきて、なんで、あんな男のために死ななあかんのや思て、ふと、見たら

手の先に小さいのが、ぶら下がってる。去いのか、
ほんで、今日は、ラーメンつくったろ言うたら、
嬉しそうな顔して、笑いよった。あんたはお母さ
んとちがうんやもんなあ、お母さんが、あんたを
殺す権利ないわなあ、心の中で言うて、自分の阿
呆笑ろた。

秀雄 色々理屈いうけど、結局は博打が面白かった
んやと思う。先が分からんということは何ものすご
う面白いことや。

ゆめ 勝手やなあ、それで、うちと子供を置き去り
にしたんか。

競艇場の歓声。

秀雄 行け、行け、行きさらせ

秀雄 やった、やった、やったで

背後の声 おっさん、よかったなあ、おお
もうけやないか

秀雄 舞台中央に肩を落として歩く。

秀雄 そんな気もしたんやな。裏目ばかりや。昨日一日働いた金一銭もあらへん。また、野宿や。家へかえろか、帰って、ゆめに謝ろうか。

ゆめ 人の倍働いた。そのうち 賄いの他に金貸しやった。借りる時は拝むのに、取りに行ったら、鬼のように言いよる。遊ぶためのお金ばかり、金かしの方がずっと貧乏やった。

ゆめ あんた（秀雄の方を見る）

秀雄 へーい（ゆめを見る）

ゆめ あんた、自分がどんな死に方したんか知ってる？

秀雄 （首を振る）何時死んだんかも知らん。気いついたら、この世に来ててん。

ゆめ おらんようになって、最初の何年間はどう捜しに行った。おったという場所に行くと、昨日までとか、一週間前とか、結局、死ぬ時まで会わへんだ。捜しに行って聞くあんたの話は、うちの知ってるあんたからは考えられへんことばかりや

った。お酒のんで、客と喧嘩したとか、お金を盗んだとか……。初めておうた人やのに親身になつてあんなんとは、別れた方がええという人も、ようけ、いたはった。

秀雄 なあ、わし何処で死んだんや？

ゆめ 病院。

秀雄 てつきり野たれ死にや思てた。

ゆめ 野たれ死にの方がましちがう。

秀雄 ……

ゆめ 病院に駆けつけると、あんたのベッドは、廊下やった。空の点滴瓶つけて、それに針も外れてた（目頭を押さえる）手を握ると少しあつたかかった。看護婦呼ぶと、洋子ちゃん、また、針外れてるやんって、笑いながら言いよつた、うちは看護婦の横面思い切りはりとばした……。

秀雄 もう、ええ、いわんといて、堪忍や、わしは空の点滴瓶つけて、死にかけとつたんか……。みじめやなあ、ほんまに。

平三郎 博打の誘惑にまけんと、平凡に暮らしてたら、今は一緒にバス乗ってたかもしれへん。

音吉 バスの中で花札がええ、よそから取ったろ思
たらあかん。よそさんは、そんなに、あもうない。

秀雄 同じところをぐるぐる回るような毎日でも毎日
が少しはちごて、幸せはそんな中にあつたんかも。
子供は？ えーと。

ゆめ あーあ、子供の名前も忘れたんかいな。元氣
やで、あんたと一緒に学校の先生で、ちよつとも、
道はずさんと、この前古希やった。

秀雄 それは、よかった、ほんま、よかった。すま
んかった、ゆめ、堪忍してや博打はもう、こりご
りや。

ゆめ ええんよ、死んだ人になに言うてもはじまら
へん。うち、金持ちになったんよ、もういっぺん
やりなおそ。も、学校行かんでええさかい

秀雄 えつ、ほんまか

うた 何言うてんの、死んだ人にむこて。

平三郎 秀さん、こっちおいで、一緒にお茶でも飲
もう。

音吉 マツチの軸賭けて、花札しよ。

秀雄 (もじもじしながら) それが、こうはしてら

れしまへんね。

音吉 急ぎの用事でもあるんか？

秀雄 8レースのあの世特別の締め切りがもうすぐやねん。ほな、さいなら（走って下手に消える）。

ゆめ あほらし。

音吉 死んでもなおらんか。

平三郎 せやけど、人の一生どっちが幸せなんか、わからんなあ。

ゆめ （思い切るように）音吉、マッチの軸かけて

花札しよう。

四人輪になる。

音吉 わあ、さんこうや。

平三郎 ちきしよう。

音吉 マッチの軸三本。

うた おもしろい？

平三郎 おもろない。音やんマッチの軸で鼻くそほ

じくんのんやめ。

うた うちの羊かんかけよか

平三郎・音吉・ゆめ （弾んだ声で） うん。

暗転。『奥』が映画館の入口。日活ロマン
ポルノのポスター。支配人出てくる。おゆ
うさんが、切符のもぎりの椅子から立ち上
がる。

支配人 あかん、あかん、今日も客のいりはパラパ
ラヤ。これやったら、城東館も長ないなあ。

おゆう 支配人さん、えらいすんまへん。

支配人 あら、また、おゆうさん、嬉しそうな顔し
て。そう言うたら、今日は水曜日かいな。はよ帰
り、はよ帰り。旦那はんと今日はしつぽり。

おゆう もういややなあ、そんな年やあらしません。

お茶のみ友達みたいやから。

支配人 なにいうてんの、まだまだお若い、これか
らやないの。

おゆう ほな、何時もほんとに勝手ばかり言うて。

おゆう 支配人に頭を下げて舞台の中央に。

支配人 おゆうはんの嬉しそうな顔みたら、ああ、今日は水曜日やて気いつくわ。おてかけさんやいのの少しも隠さはれんなあ。旦那はんいう人も、あない喜ばれたら男冥利やなあ。（客が切符を出す。切符をもぎって）おおきに。

おゆう （舞台中央で立ち止まる）今晚なににしよ。何食べてもらお、一週間ずっと考えてたのに、まだ、決まらへん。ほんま、うちは阿呆や。

おゆう 上手に消える。『奥』はバス。

おゆう 下手から走って現れる。

おゆう ゆめちゃん、ゆめちゃん。

ゆめ おゆうさん、どうしたん（バスから降りる）。

おゆう 聞いてほしい、聞いてほしいねん。うち、悔しいて、悔しいて。

おゆう、ゆめの袖を引き、少し前が出る。

バスは消える。

ゆめ 気落としたらあかん。

おゆう もう、それはええねん。だんさんに、最後まで付き添うことができたし。せやけど、うち、悔しいねん。たまらん程情けないねん。

ゆめ どないしたん、何かあったん？

おゆう もともと、お葬式は遠慮しよと思うてた。

せやけど、長男さんから、電話かかってきて、葬式は遠慮してくれて、念おされたら、どんな気がする。信男さん、長男さんやけど、ええ人やと思うてた。お母さんもおらへんし、親父が一番気い使わへんやろから、お婆さん、たのんますて、頭下げられて、やっと、嫁のまね事できると……。ほて、うち、一生懸命、世話をしたんや。なんや、やっと認められたような気になって。(間)。うちを付き添い雇うかわりに使いよったんや。それええわなあ、お金いらへんよつて。

ゆめ 旦那さんに最後まで付き添えてよかったやん。

それだけでも、ええと思わな。

おゆう せやろか？ 動けんようになって、喋れん

ようになって、押しつけられたんや。今日の電話で、自分の阿呆さがよう分かった。ゆめちゃん、うちはそんなよう出来た女やあらへん。人を恨むし、嫉妬もする。旦那さんの奥さん、死んだらええのにと、何時も思ってた。ほんとに死なはった時は、自然と頬がゆるんで、しまりのない顔になって、なんぼまともな顔しよとしても、笑うてしまらんや。うちはそんな女や。

ゆめ 誰でもそうや、おゆうさん、自分を悪ういうんはやめ。ほんで、貰うもんは、きちんと貰い。

おゆう みーんな子供に分けてしもうて、なんにもあらへん。そういうたら、うちの家も狙われてるかもしれへん。

ゆめ 大丈夫やて、あの家は借家や……。

おゆう ……。

ゆめ ごめん。

おゆう やっぱり、葬式行く。うちの、うちの人の葬式、なんで、なんで、うちが行ったらあかんの。

週に一回うちへ来て、殆ど黙あって、手伸ばしたら、扉に触れるような小さい庭を見てた。うちが、

家に帰ったら大きな庭があるのに、なんでここに
来るので、いけずして聞いたら、小さいから落ち
着くんや、おゆうがいるから、こころが静かなん
やて。(泣き伏す)。

ゆめ お葬式行くのはやめよ。ろくな事ないわ。

おゆう ゆめちゃん

ゆめ はい

おゆう どっちみちうちは、もとは今里の座布団芸
者、幸せなんか遠い昔にあきらめてた。せやけど
今は、泣かせて、思い切り泣かせて、もう、一人
で泣くのんいやや。

おゆうゆめの胸にすぎる。暗転。『奥』は
バス。

平三郎 おゆうさんはあれから、うどん屋やはっ
たんやなあ。

音吉 ほんまに、はやらへんだ。

ゆめ 一生懸命手つどうたけどあかんだ。

音吉 旨なかった、ほんま、旨なかった。あない不味いのは、あの時から食たことない。

ゆめ うたちゃんは優しいよって、おいしい、おいしい言うてうどん五杯も食べてお中こわしたんやてなあ。

平三郎 あたったんは、次に仕出し屋やって、食中毒だしよったぐらいや。

うた あの場所はなにやってもあかん、死に場所やてみんな言うた。

平三郎 最後はカラオケ喫茶。一生懸命うとてたなあ。

音吉 せやけど、おゆうはん音痴やった。

平三郎 それを本人がしらんのが悲劇やった。

音吉 おゆうはんがマイク持ったら、客が一人消え、また一人消え、ほんで、誰も来んようになったもた。

うた 最後の喫茶店閉めてから、気落としてるやろ思て、見に行ったら、返事があらへん。上がらしてもろたら、肩まできっちりとお布団きて、天井を見たはった。おゆうさん、何回呼んでも、返事

があらへん。

音吉 3日もだあれも知らんでほっといたとは思われへんほど、きれいな死に顔やった。

ゆめ うちが駆けつけた時は、目開いてた。目閉じさせて、顔を拭いたげた。

平三郎 八方を手をつくしたけど、誰も親戚がおらへんだ。旦那はんとこへも知らせたけど、うちとは関係のない人でつきかいいいう返事やった。

音吉 ほて、町内で話しおうて、骨仏に入れてもうたんやったなあ。

うた あの人の人生って何やったんやろ。

ゆめ あの人の歌が好きやった。あんたの
人気も落ちてて、ひとつもうれへん歌やったけど、
喫茶店のカウンターに頬杖ついて、ひとりでも聞いたはった。

うた (歌う) ウェディングドレスなんか着たくな
い

ウェディングドレスなんか着たくない

あなたの手枕で、こうして眠るだけでいい

小さな部屋で、あなたが来るのを待つ方がいい。

ゆめ なんにも、自分で死ぬことあらへんのに、阿呆やおゆうは、おゆうは阿呆や。

暗転。自動車が猛スピードでバスを追い抜いていく。

音吉 風ふうやんやないか。

風やん なんや、音吉にいさんか。

音吉 ぷっ、にいさんやて。

うた うちらはいくつに見えるんやろ。

音吉 風やんどこ行くんや。

風やん めばちこできたよって、鶴橋の目医者行くねん。

音吉 お前も白髪が目立ってきたなあ。

風やん アホは年とらへんのに、言いたいやろ。

平三郎 せやけど、風やんはほんま男前やなあ。

音吉 千代の富士みたいや。

風やん おおきに。

音吉 それで、しゃべらへんだら、ほんま、ようもてるで。

風やん　こんなところで、いちびってんと、目医者い
こ。あるときは、片目の運転手、そして、その実
体は、正義と真実の人、藤村泰造、ばーん、ばー
ん。はいよシルバー、ローレン、ローレン、ロー
レン。

うた　気づけていきやあ。

風やん　おおきに、ローレン、ローレン、ローレン
（上手に消える）。

ゆめ　えらいこっちゃ、鶴橋行くて言うてたなあ。

風やん　止めて。

うた　ゆめちゃんどうしたん

ゆめ　鶴橋で、車にぶつかって、ほんで風やんは。

ローレン、ローレン、ローレンの小さい声。

音吉　風やん。

うた　自転車が、空を駆け上がっていく。

ゆめ　消えた。

ローレン、ローレン、ローレンの小さな、

小さな声。一拍おいて、大きく、ローハイ
ド。暗転。

ゆめ 軒下のバケツに植えた紫陽花がきれいなあ

平三郎 雨の日の紫陽花か……。花が光を含んでる

ようや。都会の下町には季節がないような気して
たけどなあ。気がつかへんただけかもしれないへん

うた ビルが溶けるように消えていく

平三郎 森ノ宮造兵廠跡が現れた

音吉 ほんま廃墟や、幽霊みたいや

平三郎 長い間、空襲におうたまんまの姿で放った
らかしにしたった

平三郎 音やん、見てみ、廃墟と、京橋のネオンの
海が一緒に眺められるわ

音吉 どっちがほんまなんやろ

うた 大阪城が、きれいなあ。鬼はもう、眠てしも
たんやろか

音吉 暑いなあ。

ゆめ うたちちゃん、バスの外見てみ。(客席の方を
見る)

うた えらい人通りや。

平三郎 何事やろ。

遠くで盆踊りの音。

ゆめ お盆や。

音吉 みんな白い着物きたはる。

平三郎 みんな楽しそうやなあ。

うた 一年に一回、帰ってきはったんや。

音吉 知ってる人いてるか。

うた うち、あの人知ってる。あつ、角曲がつてし
もた。

平三郎 わしは、人が多すぎて分らへん。

音吉 ちよんまげ結うてる人もいてる。

平三郎 浮見町にこんなようけの人が生きてたんか。

盆踊りの音消える。

うた みんな、夜明けと一緒に帰って行かはった。

運転手 とうとう、二十代や、青春どまん中や。

平三郎 たいそに言うほどの青春やなかったけれど。

音吉 どっちかいうたら、暗い方やったけど。

うた、ゆめ うちらはちがうよ

うた こんなおぼんくさい服いらん（服をはぎとる、

下は真っ赤なワンピース）

ゆめ みなさん、びっくりしましたやろ。けっこう

べっぴんや。

うた ミス大阪。

ゆめ ミス四丁目。

ゆめ、うた 結局、みんな、若かった。

平三郎 わしらも負けてられへん、髪の毛はふさふ

さ。

音吉 女の子にはもてへんだけけど。

運転手 荷物はよう持てた。

平三郎、音吉、運転手 結局、みんな、若かった。

バスのエンジンをふかす音。

平三郎 バスのスピードが上がったんちゃう

音吉 あっ、親父や、自転車に山ほど酒積んで、汗

拭きながら坂道をこいでる、親父の丁稚自転車、馬鹿にしたらんだらよかった。ライトバンで運ぶより、酒の重さよう分かったやろう。このころは、女に狂て、二十回も勘当されとつた。

ゆめ うん、町の様子がどんどん変わっていく。万博まであと30日

うた うちの家が現れた。あの文化住宅、うん、あの長屋。新建ち言うたんや。あつ、清次がいる。

清次さんがうちに会いに来たはる。降りして。

音吉 行ったらあかん、行ったら、不幸になる。会いたくないて言うてたやんか

うた お願い、とめて、降りして、降りして下さい。

音吉 (叫ぶ) 行ったらあかん。

バスの止まる、ドアが開く。駆け出すうた、
追いかける音吉。

平三郎 何処へ行くんや。

音吉 決まってるやろ。うたを止めるんや。

平三郎 なんで、好きやといわへん。

音吉 わしは、いじめっ子の音吉、助平の音吉、それでええ。せやけど、清次は、うたを不幸にする。流れ者もんにうたは渡されへん。

平三郎 お前の百年の片思いも辛いやろう。せやけど、うたは、死ぬほど清次に会いたいんや。それがあの子の恋や。

音吉 やかましいわい。

平三郎を振り切って、音吉バスを飛び出す。バスのドアの閉まる音。『奥』の幕が閉まる

音吉 バスが消えよった。ここは何処や。

『奥』、ストリップ劇場。音楽、野次が幕越しに聞こえてくる。下手から、肩を落としたうたがでてくる

うた 音さん。

音吉 うたちちゃん。

うた あの人、見失のうた。

音吉 ええやん、バスに帰ろ。あつ、歌の出たス
トリップや。

うた ほんまや、あんた、よう来てたなあ。ほんで、
いつもうちの出番になると、こそこそ逃げ出して。

意気地なし。

音吉 あほ、お前の裸なんか、見たないわい。

うた 嘘つき。見たかつたくせに。

音吉 ようし、ほんなら、今見たろ。（幕から入る

うとする）

うた そんなんあかん、卑怯もの。

幕が開く。

音吉 なんや、ストリップとちやう。

うた あつ、ここは通天閣の小屋や。七つの時から、
お父ちゃんに連れられて、祭りや芝居の舞台に立
って、歌うたてた。うちは浮見町の歌姫。清次はやく
ぎのヒモ。稼いだけもって行かれた。

『奥』（舞台）に、司会者登場。

司会者 下町の歌姫の登場です

拍手、客のかけ声

うた（子役） オーマイ パパ 帽子を横つちよに
かぶり おどけていた やさしい 私のあのパパ
オーマイパパ 帰らぬパパ

大きなあの手を抱かれて、夢見た……

歌声が遠くなる。『奥』暗転。

音吉 あっ、真っ暗になった。（叫ぶ）うた。

駆け出した音吉、どーんと手品師にぶつか
る

手品師 ぼん、大丈夫か。

手品師の手に子役のうたが。

音吉 ふっ、ぼんやて。わしは百才や。なんやこ
は。手品師のおっさんの大きな影の手の先に、ほ
んま、ほんま、小さい女の子がぶら下がってる。

うた（音吉の背後から） あれ、七つの時のうちや。

音吉 いっぺんにそんな頃に来てしもたんか。

うた うん。うちが浮見町に来た晩や。

音吉 あん時、初めてあんたに出おたんや。

野球の実況放送が家から、漏れてくる。そ
して、遠ざかる。『奥』、石井さんの家。
家の上手に石井さんの影。

音吉 石井さんの家や。ずいぶん長いこと空き家や
った。

うた うちの子供の時から空き家や。あれ、石井
のおじいさんがいたはる。

音吉 そんなアホな、おじいちゃんは、わしらの子

供の頃死んだんやで

うた ほんだら、あれ誰のかげ？

音吉 さあ

うた こわい話あったなあ。晩におしっこ行くのん怖かった。

音吉 息子が若うで死んでから、近所の誰ともつき

あわんで、息子の嫁と二人で住んだはった。

うた あのちいぢやな家で、何があったんやろ。

音吉 そのうち、嫁もころっと死んでしもた。葬式の晩、町内の人が、数珠忘れたんに気ついて、石井さんの家に引き返したら、見たんや、ポリポリポリ。骨壺抱いて、おいしいでこれ、妙子の味する。ポリポリポリ、見たなあ。

背後に石井さんの影。かっぱれを踊り出す

うた きゃあ！あっ、おじいちゃんの影が踊りだした。カッポレや。

音吉 カッポレカッポレ甘茶でカッポレ

音吉、影と一緒にになって踊る。暗転。石焼
き芋の声。ハーモニカの音。

うた 音ちゃん、うちらだけ、先へ先へと行ってる
んと違う。もうバスには戻られへんねやろか。迷
子になったんやろか。うち怖い。

音吉 大丈夫やて、わしがいる。あれ、あんたのお
父さんや。

物干し竿の声。遠く離れて、傘、修繕の声。

軒下の風鈴。『奥』は手品師の家。手品師
が座っている二人が覗き込む

うた ここがうちの家や。お父ちゃんがいる。ほら、
この窓から覗いてみ。

音吉 いたはる。ほんまに大きな人やなあ。座って
たら、畳一枚ぐらい場とったはる。この熱いのに
燕尾服を着て。

うた あの服の下に、いっぱい手品の種を仕込むん
よ。音ちゃん、あの人、うちの本当のお父ちゃん

とちがうねん。手品師にするつもりで、旅の一座からもろうてきはったんや。

手品師 お前、ぶきちよで、手品はあかんけど、歌が上手やなあ。下町の歌姫や、ふつ。

うた 殆どしゃべらんと、大きな体を申し訳なさそうに小さくして、お酒を飲むのだけが楽しみやつた。酔うと、指先から、次々とランプが出てくる。まるで、美しい夢のようや。

音吉 あつ、シルクハットをかぶらはった。

うた 出かけるみたいや。

音吉 ついて行こう。

町のざわめき

うた デパートへ行かはるんや。足が弱って、地方へはもうよう行かはらへんだ。せやけど、遊園地やデパートの屋上で、子供ら相手に手品するのがものすごう楽しそうやねん。

デパートのざわめき。『奥』が舞台。

子供A（声） わあ、鳩や、すごいなあ。

子供B（声） 今度は、白いのんちごて、飴色のん
だして。

手品師 飴色のんは、ちよつと旅に出て留守なんや。
かわりに、こんな花をあげよ。

女の子の泣く声。

女の子の母親（声） すんません。この子にも貰え
ません。兄妹で喧嘩してしもて。

手品師 ああ、かまへん、かまへん。ほら、いくつ
でもでるんや。うた、あの子にあげて。ほな、後
頼むで、ちよつと疲れたよつて、あしよこに座つ
て聞いてるわ

手品師が舞台から降りる。子役のうたが舞
台に。

うた りんごの花びらが

風に散ったようなあ

手品師（呟くように） 月夜に、月夜に、そつと：

…。

子供A（声） おっちゃん、どうしたん。なあ、お

っちゃん。

うた（子役） お父ちゃん、お父ちゃん

うた お父ちゃん、お父ちゃん。（子役の声と重なる。）

暗転。野球の実況放送が家から、漏れてくる。そして、遠ざかる。犬の遠吠え。

うた おとうちゃんが死んで、うち、みなしご。音
ちゃん、手つないで。

音吉（間） うん。

数人の子供の走る足音が二人を抜き去って行く。（声と音）

子供の声 あっっちゃど、旋回しとる。ホイラーン。

音吉 トンボつりや。まだ空き地がようけあった。

チャルメラの音。

うた 音吉ちゃん、何してんの？

音吉 (蹲りながら) 蛤をセメントで、擦ってんねん。

うた 貝笛作ってんの？

音吉 せや、こないして、貝の背中擦ってたらな、穴が二つ開きよるんや、ほたら、唇に当てて、吹くんや。あいた、指こすってしもた。

うた えらいこつちや、血出てるやん。うちが吸うたげる。

音吉 うたちちゃん……。

うた 音吉ちゃん、貝笛吹いて。

貝笛、曲は「ふるさと」。バスの近づいてくる音。

うた あっ、バスや

バスが止まる音

全員、子供になっている。

ゆめ うんちゃん、早よう、早よう

運転手 はあーい、直ぐ行くよって、配つといて

ゆめ (トランプをくばりだす) これ、うんちゃん
の分

平三郎 うんちゃん、うんちやてあんまりええ響き
やないなあ。

運転手 やって来る。

音吉 おまえ名前なんや？

運転手 笑わへんか？

音吉 笑わへん。

運転手 秀乃進^{ひでのしん}。

一同爆笑。

音吉 ええ名前やんか、平三郎よりましや。

運転手 せやから、うんちゃんてええ言うてんね。

親うらむわ、今まで滅多に名字呼ばれた事あらへん

うた ほんなら、うちからいくで。

平三郎 トランプもおもしろいけど、これ、終わったら、缶蹴りしよう

音吉 探偵ごっこがええ

秀乃進 立ち上がる。

秀乃進 あるときは、片目の運転手、そして、その
実体は、正義と真実の人、藤村泰造、ばーん、ば
ーん。

音吉 将来はバスの運転手。

ゆめ うちら、ここが、ふるさとなんやなあ。小川
もなければ、森もないけど。

平三郎 路地ばっかりの町やけど。

うた 帰って来るとしたら、ここしかないんや

音吉、貝笛をふく。ごはんよーという母の
声が、4回、ゆめ、うた、平三郎、音吉が、
それぞれに答え、下手、上手に分かれて消
える。秀乃進、周りをきよろきよろ見渡す。

秀乃進 （肩を落として）わし、この子、ちやう
もんなあ。

秀乃進 （下手に向かってトボトボ歩きながら）わ
し、何処の子やねんやろ？

音吉が置いていった貝笛を拾う。貝笛を吹
く。ごはんよーの声、勢いよく振り返るが、
また、うなだれて、歩きだす。秀乃進、ご
はんよーの声。秀乃進、驚きと、喜びと、
涙の入り混じった表情で、客席の方を向く。

秀乃進 ええ名前やなあ、秀乃進。

暗転。バスの中。

ゆめ 小学校の頃、まだ、浮見町に一箇所だけ、たんぼあった。

うた ものすごく怖いお百姓さんが住んだはった。

平三郎 鍬振り上げて、追いかけられた事もあった。

音吉 本気やったぜ、あのおっちゃん

うた たんぼも、怖いおっちゃんも、あつという間に

消えたけど、空き地はまだ、ぎょうさんあった。

ほら、あそこにも、あそこにも。

平三郎 夏の夕方になったら、トンボつりする子供

が、並んで、ポケーと西の空を見とつた。

平三郎 トンボつりの期間はふた月もなかった。盆

がすぎたら、もう、あかん、赤トンボが舞だした

ら、終わりや。

音吉 しつこうに、秋風吹いても、空き地の真ん中

でポツーンと立って、西の空見とつた。あほ、今

ごろ来るかいな言いながら、言うた奴も、自転車

止めて西の空一緒に眺めてた。あいつらみんな、

あれからどうなったんやろ。

運転手 ぼく、このバス降りたる。

音吉 運転手が降りてどうするねん。あんたが連れ

てきたんやんか。まあ、降りても、また、90年、やり直すか。わしはもうええ。おかあちゃんの、あったかい腹の中に戻るほうがええ。

運転手　そうやなあ、ぼくもやめや。もう一回やり直しても、やっぱり、おんなじ運転手になるやろし、同じ道歩いて行く気がするわ。しょうものうても、それが自分の人生やから。

ゆめ　そらしゃない。生まれてくるのも死んでいくのも結局は一人やから。

うた　せやから、生きてる内は、傷つけおうても、人と手を繋ごうとするんやろうなあ。

平三郎　大阪城の石垣に、鬼が座ってる。

ゆめ　鬼には、時の流れは関係ないんやろか。

平三郎　なんや、寂しそうやなあ。

音吉　わしらこれからどないなるんやろ。

ゆめ　どんどん、小さくなって、おかあちゃんのお中に戻って、それから……。

うた　ふっと、消えるんやろか？。

平三郎　死ねということは、そんなかもしれへん。

ほんま、人の一生で、一いっとき時の夢みたいなものや

なあ。

うた はよ、おかあちゃんの、あったかいおなか中
に戻りたい。おかあちゃんにやつと会える。

ゆめ （客席の方を指さす）あれ、うちらとよう似
た子供が向こうからやってくる。

平三郎 いや、あれは、わしらや。わしらの子供の
頃や

音吉 わし、みんなからちよつと離れて、ポケット
に手つっこんで肩いからして歩いとる。

うた 音吉に頭叩かれた。あいた、何で叩くのかわ
いそうに。

ゆめ こっちに来るにつれて、年がいつてくるよう
や。うち、中学生になった。無邪気やったなあ、

あの頃。

音吉 ニキビ面の平さんが、女学生と話してる。

平三郎 あれは、わしの夢や。結局は一言もようし
やべらんだ。

音吉 うたちちゃんや、透き通るような美人や。

うた うち、二十歳、せやけど、あんまり楽しいこ
とはなかった。

ゆめ 花嫁衣装のうちがいる。

うた きれいで、ゆめちゃん。

ゆめ おおきに、うちに近づいてくるほど窓の外
のうちらは年をとる。

音吉 百才にちこうなる。

ゆめ あれは、お金を一枚一枚勘定している金貸し
のうち。

平三郎 あれは、電卓得意な人差し指の平三郎。

音吉 客より先に酔っぱらう、酒屋の音吉。

ゆめ ふっ、うち、ひ孫を抱いてる。

平三郎 米寿の平三郎。

音吉 百……。

平三郎 あれがわしらの一生や。さあ、バスを降り
て、迎えに行ったら。

ドアの開く音。四人がバスを降りる。四人
にスポットライト。

うた あれ、バスが消えた。

バスのとまる音。暗転。最初の場面。

うたを除く四人が観客席の方を見て立っている。うたは座りこんで動かない。

警官 （遠くから）もう、お帰りか？ 今日もバス

はきませんか。

ゆめ あっ、おまわりさん。なんや、一郎さんかいな。

平三郎 近くの交番に勤めてるのに、時々帰ったらんかいな。

警官 なんやかやと忙しいて。

音吉 まあ、盆にでも帰ってくるんはええとせな。

うちなんか、何年も帰ってこんわ。猫や犬が家族や。あれ、指の先けがしてる。何時したんやろ、血も出てる。それと、何か言うこと忘れたみたい
な気するなあ。誰か知らんか？

平三郎・ゆめ 知らん

ゆめ 一郎ちゃん、あんたとこの隣の家、昨日の雨でつぶれたで。

警官 だあれも住まんようになって三十年、崩れて

も不思議やないなあ。

ゆめ ほな、ぼち、ぼち、去のか。

平三郎 なんぎやなあ、うたちゃん寝てしもてる。

うた うーん、よう寝た。(伸びをして立ち上がる。

うたの服はそのまま) あれ、みんな帰るんか、ちよつと待って。なんやこれ、うちの足下で、うちが寝てる。

ゆめ うたちゃん、帰るで、起きや。どうしたんうたちゃん。みんな、みんな、はよ来て、うたちゃん、うたちゃんが。

うた なんや、うち、死んだんかいな、それにしても、みんな慌てて。音吉なんか、あれあれ、泣いてくれて。おおきに、みんな。

音吉 (叫ぶ) うたちゃん、わいは、わいは、あんたが好きや。

うた おかしいなあ、泣きながら、音吉がなんか言うてる。もう、うちには聞こえへんよおお。体がかかるうなった。死ぬ死ぬって怖がってたけど、こんなもんかいな。うちの百年、面白かったなあ。あれえ、バスが来よつた。うち、まだ、夢み

てるんやろか？ 陽炎がたってる、そん中をバス
が揺れるようにして、やって来る。ほら、ほら、
ほら。

幕

平成9年9月20日 了

一九九七年

作品3 トランプの家の迷子たち [目次へ](#)

登場人物

光子

平太郎

昭あきら

敏子

幸子さちこ

笑子えみこ

作造

風太郎ふうたろう

中年の女の客

酒屋のご用聞き

労務者風の男
A
B
C
D
E

嵐の夜の、若い女、婆さん、魔女

範子

妙子

幕は上がっていない。川のせせらぎが聞こえる。

昭、下手から登場。

昭 この川の音おぼえてる。

小鳥のさえずり。鶯の鳴き声。

昭 自然のハーモニーやなあ。

舞台中央に進む。

昭 確か、このへんやと思うんやど……。行く川の

流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらずか

……。それにしても、二十年か……。月日は、ほ

んま、飛ぶように過ぎて行くなあ……。(見上げ

る)向こう岸に、ひよいと背中押されたら、川に

落ちひんかいな思うほど、川の際に、三軒続きの

長屋があつて、その真ん中の家の二階に、赤い字

でランプ占いちゆう、ガクツと片っ方の肩落と

したような傾いた看板がかかった。(間)みんな

な、あの時は、トランプの家に集まった迷子やっ
たんやろなあ。一時集まって、ほんで、また、よ
うけの人に紛れてしもた。

目を閉じ耳を澄ます。

昭 耳を澄ますと、川の音があん時のいろんな人の
声に聞こえてきよる。まるで、遠い昔から、僕を
呼んでるようや。

(暗転)

声にならない人のざわめき。バイオリン演歌が小
さく流れ出す。光子の声。最初は小さく、次第に
はっきりしてくる。幕があく。

トランプ占い師光子の仕事場兼居間。中央に二階
への階段。下手のかまちに敏子。光子が中年の女
性を占っている。昭、笑子はその後ろで占いの順
番を待っている。

光子 奥さん、この縁談、あきまへん。

中年の女性 え、あきまへんか。

光子 何にもせんでも、十日もせんうちに潰れます。

中年の女性 気に入った。はっきり言わはる。他の

占いみたいに、当たり障りの無いことしか、言わ

へんのとちごて、ここの先生は、バシと言わはる

てきいてきたんやけど、ほんまやわ。実は、うち

の義理の姉の旦那の、妹のお母さんが、

光子 お宅のお母さん違いますの？

中年の女性 (腰を上げる) まあ、そうも言います。

光子 奥さん。

中年の女性 へえ、他にもなんか？

光子 三百円。

中年の女性 あ、すんまへん。百円、二百円、三百

円、ほな、みなさん、どなたはんも、お先に。

(金を畳の上において、下手のかまちから姿を消

す。)

平太郎、階段を降りてくる。

光子 お父ちゃん、風邪どうや？

平太郎 ぼちぼちや、のど乾いたよって、水のもと
思うて。

光子 後から、玉子酒でもつくったげる。

平太郎 おおきに、そや、テレビで台風くる言うて
るで。

光子 さつき、それる言うてたんちがいますの。

平太郎 それが、急に気変わらはったらしい。それ
にしても、まだ、お客さんようけいたはる。皆さ
ん、こんなむさくるしいところ、ようおいでで、
ほんまにおおきに。（たたきに腰掛けている敏子
に）お嬢ちゃん、そんなところにおらんと、上にあ
がり。

敏子 ここでいいです。占うてもらうのと違います
から。

光子 さつきから、何回も言うたやけど。雨宿りさ
せてもうてるだけやからて。

下手から、酒屋のご用聞きが入ってくる。

御用聞き えらいこっちゃ、近鉄とまってまっせ。

光子 なんで、まだ、雨が降ってるだけで、風なんか吹いてへんのに？

御用聞き 事前の策言うやつちやいまつか。下手に走らして、なんどあつたら、会社の責任や思うてますのやろ。石橋叩いて渡るんもええけど、せこおますなあ。嵐の中を疾走する夜汽車。健さんが、哀愁を帯びた目で窓の外に目をやっっている。

光子 その目は、どう見ても、秋刀魚を狙うネコの目や。

御用聞き あきまへんか、けんはけんでも、刺し身のけん。

平太郎 嵐、嵐いうたら、わし、電車の中から、雷、ぼん、ぼん、落ちよんのん見たことある。大和の三輪さんの縁日からの帰りやった。急に電車が止まってしもて（間）みなはん、雷いうたら、空にペケペケと光って、ちよつと、間おいて、ドドンと思てまっしやる。それは甘い。目の前に落ちるやつは、全然違う。真っ白い火柱や。バーン、

光子 あんた、ほんまに風邪ひいてんの。

平太郎 うるさい、いまええとこや。

光子 うるさい……

平太郎 かにん。もうちよつと喋らして。とにかく、まっすぐに空気引き裂きよる。そのたんびに、キヤーと悲鳴が上がる。女は男の胸にしがみつく。わしは誰もいてへんから、キヤ言うて、手すりにしがみつく。

御用聞き ええおっさんがキヤでつか。

平太郎 せやかて、怖かってんもん。

御用聞き わしもはよいなな。ほな、醤油一本と、菊正一本。それに、空瓶代。（光子に小銭を渡す）奥さん、板はらんで大丈夫でつか？

光子 大丈夫、大丈夫。生駒さんが守ってくれはるさかい。それに石切さんもいたはる。それに、（平太郎を横目で見る）お父ちゃんもそんなとこでぼーとしてんと、はよ寝なさい。自称病人なんやろ。

平太郎 自称て……。ほな上がるわ。

御用聞き下手に退場。平太郎階段を上がりかける。

光子 お父ちゃん。

平太郎 ……（振り返る）

光子 東京、大丈夫やろか？

平太郎 なにが？

光子 何がて、台風やがな。

平太郎 そんな、近畿にもまだ来てへんのに。

光子 せやかて、英世が心配で。

平太郎 英世？

光子 自分の子供の名前忘れて、どうしますの。

平太郎 ああ、英世なあ。テレビで東京の様子見て

きたるわ。

平太郎 階段を上がっていく。

光子 うちの息子、英世言いますね。子供の頃は、

野口英世みたいでいやや、言うてましてんけど、

医者のお卵になってからは、ええ名前やなあなんて、

勝手なことを…。

笑子 うち、お医者さんきらい。注射するもん。

光子 大丈夫、うちの英世は注射も上手。全然痛いことない。それに、ほんま、親孝行で、はよ、一人まいの医者になって、お母さんに楽させるいうんが口癖で、それに、男前。

昭 あのを、

光子 え、

昭 お話中、すみませんけど、本職の方に戻っても
らわれしまへんやろか。台風も来てるそうやし

光子 分かってま。

風の音

昭 気のせいかもしれへんけど、ちよっと、吹いて
来たみたいや。この家大丈夫やろか？

光子 気にいらんだら、出て行ってもうても、かま
へんけど。

昭 そういう意味ちやいます。僕はすぐに思てるこ
とが口にでるたちで。気にさわったら、すみまへ
ん。

光子 英世やったら、人の気にさわるような事は言

わへん。ほな、次の人。

昭 （にじりでる） 僕です。

光子 ちいちゃい女の子、差し置いて、ええ男が、僕ですやなんて、お嬢ちゃんどうぞ、わしは一番後でええて、一言いえんのんかいなあ。英世やつたら、

昭 僕、英世と違います。

光子 せやなあ、あんたは、ひでーえよやなあ。

昭 （あとずさりして） 何で他人にこんな事言われなあかんのやろ。

光子 お嬢ちゃん、おいで。何処から来たん？

笑子 阿倍野。

光子 えらい遠いところから一人で。

笑子 （頷く）

光子 ほんなら、ここに、占う人の生年月日と、お名前書いて。

笑子 生年月日しらん。

光子 ほな、お名前は？

笑子 タマちゃん。

光子 猫みたいな名前やな。

笑子 猫や。

(間)

光子 猫かいな。ほんで、オスカメスカ？

笑子 しらん。おばちゃん、タマおらんようになってしもてん。うち、心配で。

光子 いつからやのん。

笑子 えええっと、木曜日。

光子 三日前やなあ。

笑子 いったつも、うち、家に帰ったら、ずっとタマと遊んでたんや。

光子、トランプをきり始める。

光子 お母さんは？

笑子 お仕事。

光子 お父さんは？

笑子 (下を向いて) ……。

光子 おばちゃん、アホやなあ、いらんこと聞いて。

ほんで、どんな猫や？

笑子 白と黒。片っぽうの目の回りが黒うて、尻尾がないねん。西瓜が好きで、お風呂が嫌い。

光子 お風呂にいれた事あるの？

笑子 うん。(泣き声になって)もう、絶対、お風呂に入れたり、顔に袋かぶせたりせえへんから。ひげもひつぱらへん。それに、

昭 まだあるんかいな。そら、猫も家出したなる。

光子 うるさい、気が散る。

光子、トランプを並べる。

笑子 学校からかえって電気つけたら、いつも、うちの足にじゃれつくのに……。何処にもおらへんねん。(泣く)お母さんに言うたら、明日一緒にさがそうって。

光子 お母さんと捜したん？

笑子 ううん。お仕事に行かかった。ほんで、うちだけで捜したんや。団地の一階から、八階までの廊下、タマ、タマ。

敏子、たたきから居間に上がり、笑子を見つめる。

昭 タマ、タマ言うたん。その猫はオスやなあ。

敏子 ちやかさんといて、かわいそうやないの。

昭 すんまへん。せやけど、なんでぼろかすに言われなあかんのやる。帰りとうなってきた。えらい
ところ来てもうた。

敏子 八階建ての団地で、猫が迷うてる。みんなおんなじドア。

光子 同じドアでも、その向こうにある生活は、どれ一つとして、同じもんはあらへん。考えたら、不思議なもんや。

笑子 うちが目つむってても分かるよ。私のお家やもん。お母さんと、私のおいがするもん。

(間)

敏子 一人でよう来たね。

笑子 前にお母さんと、石切さんに来た事があるの。

そんな時、川の向こうに、トランプうらないって書いてあるやろ、あそこの占い、よう当たるんやて、お母さん教えてくれはった。

敏子 台風来る言うてるし、お母さん心配しはらへん？

笑子 タマのおるところを占ってもらいに、石切さんに行きますて、手紙書いてきたから大丈夫です。

光子 しっかりしてるなあ、お嬢ちゃん。ほんで、この猫、ひろたんと違う？

笑子 うん。公園で。

昭 もろたんや言われたら、どうするんやろ？

敏子 ちやかさんといって、今大事なときやから。

昭 ちやかしてへん。ほんまにそう思たんや。えらい、商売やなあ。

光子、一心不乱にトランプを切り、並べる動作を繰り返す。昭、敏子、呆然として、光子の手元を見つめる。

敏子 きれい、トランプが生きてるようや。

昭 ほんま、キングやクイーンが踊っているようや。

敏子 (笑子の肩を抱く) きっと見つかるよ、タマ。

笑子 (光子を見て) おばちゃんの顔、こわい。

敏子 こわいことあらへん。あんたの為に、一生懸

命占うてくれたはんねんさかい。

光子 ひろた公園にいる。

笑子 何回も捜したけど。

光子 大丈夫、生まれたところに帰るて出てる。

笑子 お母さんは、公園にほかされたんや言うては
った。

光子 お嬢ちゃんが、公園でひろたんやろ。それや
ったら、そこが生まれたとこや。

昭 大きな公園か？

笑子 ううん、ちっちゃい三角公園。

敏子 うちも一緒に捜したげる。一人で捜して見つ
からへんだらかわいそや。

光子 うちの占いがあたらへん言いますんか。

敏子 いいや、そんな意味やのうて……。阿倍野は、
帰り道になりますから。それに、もう来はらへん
やろうし。

光子 誰が？

敏子 いいえ、なんでもありません。

笑子、三百円を光子の前におく。

昭 子供は半額ちやいますの？

光子 占いに、子供も大人もあらへん。せやけど、
猫やから、百円にまけといたげる。

笑子、立ち上がろうとして、ふらつく。

光子 どないしたん。

笑子 ちよつと、しんどい。タマ……

光子 そら、あかんわ、二階で横になるか、（立ち
上がり、二階に向かって叫ぶ。）お父ちゃん。

平太郎、階段から顔を出す。

平太郎 なんや。

光子 （笑子の額に手を当てながら）この子、気分

悪いんやて、下は狭いよって上で寝かしたげよ思
うやんけど。

平太郎 そらえらいこっちゃ、わし、寝間ひいたる。
敏子 うち、抱いて上がります。

光子 そうか、頼むわ。

昭 僕、医者呼びに行きましょか？

光子 熱もないし、顔色もそんな悪ない、暫く様子
みよ。

敏子、笑子を抱いて階段を上がる。

昭 子供も色々やなあ。憎らしいガキもおるけど。

光子 なに言うてますの、子供は親の鏡やで。

昭 ほんなら、おばさんの鏡が、英世さんか。

光子 もつたいたい。せやけど、兄ちゃん、初めて
ええこと言うてくれた。英世がうちの鏡やて、ほ
んま、うれしい事言うてくれる。(二階へ上がる
うとする)ちよつと様子見てくる。

敏子、階段を降りてくる。

敏子 おばさん、大丈夫です。あの子、お中すかし
てるだけです。

敏子の後ろから平太郎が顔を出す。

平太郎 毎日、五十円ずつ、おやつ代もろてるんや
て、土曜日は給食ないよって、二百円。猫おらん
ようになつてから、うちへこよう思て、金貯めて
てんやて。そんで、今日は朝食べたきり。目も回
るわな。

光子 かわいそうに、子どもはお中すかしてんのが
一番かわいそうや。何にもあらへんけど、おにぎ
りでも。そや、台風来る言うてるし、それに電車
も止まってるし、（敏子と昭の方を見て）うちら
の分も、ご飯あるだけ握ってしまお。

敏子 私は……。

光子 袖振り合うもなんとか、遠慮する事あらへん。

昭 僕、梅干しあきまへんね。

光子 はい、はい、何にも入れしまへん。

敏子　うち、手伝います。

光子　え……。　（間）　そうか、ほんなら、手つどう
てもらおか。

平太郎　危ないから、外でたらあかん言われたら、
家で猫と遊ぶしかないわなあ。なあ、光子、何処
ぞにのらくろみたいな猫おらへんやろか？

光子　のらくろみたいな人やったら、心当たりあり
ますけど。

平太郎　……

光子、敏子、上手に消える。下手から、作造が入
ってくる。

作造　何時もやったら、うるさいくらいにおる鳩、
一匹もおらへん。空も、急に夜みたいにくろうな
ったり、蛍光灯の紐ひっぱったみたいに、ふうつ
と、明かるうなったり、けったいな天気や。ほん
で、かだだが湿るような細かい雨が降つとる。

平太郎　こんな天気でも、作やん、石切さん参っ
てきたんか？

作造 そうや、毎日の、たった一つの楽しみやもん。
下るんも一歩ずつ、上がるんも一歩ずつ、途中で
死ぬかもしれへん。

平太郎 そんなことあるかいな。あんたは元気やさ
かい。それに比べたら、わしはあかん、何時も病
気ばっかりや。

光子 (台所からの声) いいや、お父ちゃんは元気
やで。

平太郎 何を言うか、この病弱つかまえて。

おにぎりの皿を持って、光子下手より。

光子 この前の、隣のぼやで、長屋でいちばん最初
に飛び出したんは、お父ちゃんやさかい。

平太郎 ……。

作造 そやさや、枕抱えて、音川に落ちてんなあ、
平さん。

平太郎 熱出てきたみたいや、二階で、寝てるわ。

光子 これ、もって行ったって。(皿を平太郎の目

の前に）ちよっと、お父ちゃん、このおにぎり見
て。

平太郎 うまそうやなあ。

光子 どうや、綺麗に同じ大きさの三角おにぎり。

あの娘、にぎったんやで。上手やろ。おにぎり一
つ握るの見てても分かる。苦勞してるわ、あの娘。

作造 お客さんか？

平太郎・光子 （顔を見合わせて）さあ……。

平太郎 ほな、持っていったるわ。ほんま、ゆっ
くり病氣もしてられへん。

平太郎、ふらつきながら、階段を上がる。

作造 わしも、暇やなあ。病氣にでもなるか。

光子 がまの油売り、また、やははったら？

作造 もうじき、八十やで、お光はん。ほんまに手
切ってしまうがな。

光子 （昭の方を見て）兄ちゃん、ここは、昔、五
目長屋言われててなあ、もう一つ同じような長屋
が続いてて、石切さんの参道で、いろんな芸や、

露店や、占いを生業（なりわい）とする人が住んで、ほんまに色々混じった五目ご飯みたいやつたんや。

昭 猿回しもおったんやろか？

作造 おった、おった。せやけど、あの芸は、はじめは面白いけど、段々悲しうなってくるなあ。

昭 自分が猿回してるんか、猿に回されてるんか。

作造 いいや、回ってる猿と自分が一緒に見えてくるて、あの男よう言うとった。猿が死んだとき、あいつ、自分の首に輪っか作って、作やん、このひも持って、わし回して言うて、子供みたいに、わあわあ、泣きよった。一人で、猿回しはできへん。

（間）

わしらは、道ばたが舞台やった。そや、晴舞台や。陣中膏の旗をたてて、さあさあ、御用とお急ぎのない方はゆつくりときいておいで、遠目、山越え、笠の内、きかざる時は物の文色あいろと道理が判らぬと

いう。遠くから見たり、人の頭越しに覗いてたんじゃ何のことかわからん。さあ、遠慮はいらないから遠くの人には近くへ、近くばよって目でごろうじろだ。ただいまよりは陣中膏はがまの油売りの始まりだよ。

さあて、お立ち会い

手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四六のガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガマとはガマが違う。あんなものには薬石効能がない。手前のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲れた四六のガマだ。四六、五六はどこでわかるか。前足の指が四本、後足の指が六本。これを名付けて墓は四六のガマ。一年のうち、五月、六月、八月、十月に獲れるところから、一名五八十（ごはっそう）の四六のガマとも言う

光子 うまいもんや、ひとつも衰えてへん。

作造 聞いてくれる客がおらんようになっただけやろか？ せやけど、息もきれるわ。

作造、客席の後方を見る。

昔は、石切さんの坂道、走って上がっても、なんも、息一つ切れへんだ。せやけど、自分だけが、辛い思たらあかん。こんな天気やのに、ようけの人がお百度参りしたはる。わしは、もう、お百度よう踏まんよって、（百度紐を取り出す）皆はんと同じように、一本一本勘定するんや。あの人願いかなえたってや、今度はあの人やでえ思て。あんなに、一生懸命参ったはんねんから、きつと、病気ようなるやろってなあ……。参ったはる人見ながら、ときどき思う事あんねん。顔がみんなちやうように、生きるんも、死ぬんもそれぞれや。人の一生でなんなんやろ？ 明日にでも分かる気がするんやけど、こんな歳まで生きてきても、なんも、わからへん。

（間）

せやけど、わしが病気なったら、誰か石切さん参ってくれはるやろか？

光子 立派な息子さんがいたはるやんか。

作造 大きな病院に入れてくれるかもしれない。立派な葬式だしてくれるかも知れへん。せやけど、誰ど石切さん参ってくれるやろか？

光子 うちの方が先に行くかも知れへんけど、うちが参ったげる。お百度踏んだげる。

作造 おおきに、おおきに、わし、石切さんに抱かれて死ぬねん。

舞台が薄暗くなり、風の音。

作造 台風来そうやなあ。ほな、帰るわ。

光子 一人で怖かったら、おいでや、おんなじ長屋やからうちの方が大丈夫や言う事あらへんけど。

人が多いよって、にぎやかや。なんかあったら、壁たたき、すぐに行つたげるから。

作造 わし、見たいなあ。

光子 何を見たいの？

作造 わしのためにお百度参りしてくれる人を、いつもの石の上に腰下ろして、お百度紐勘定しながら

ら、その人の姿見てたいなあ。

作造、下手に消える。

昭 ほな、うらのうてもらおっと。

光子 それどころやあらへん、台風や、病人やて忙しいんやから。台風来たら、男手がいるよって。

こんな時に英世が居てくれたら、どんなに気丈夫か。さて、うちは、お父ちゃんの玉子酒つくる。

そらそうと、東京大丈夫やろか？

光子上手に、入れ違いに敏子が入ってくる。

敏子 風も強ようになって、雨の音も。それに夜みた

いに暗うなって……。

昭 ほんまに来そうやなあ。えらいこっちゃ、ほんまにこの家大丈夫やろか？飛ばされたら、川の中

や。

敏子 うち、金槌。

昭 僕も、おかあちゃん。

敏子 おかあちゃん……

昭 なんか、家が揺れだした。

光子、上手から登場。

光子 心配せんでええ、そよ風でも、うちの家は揺れるんやから。

昭 台風やったら、飛んで行くんちやいまつか。まだ、死にとうない。

光子 たいそな子やなあ。大きく揺れるだけで倒れへん。うちの家は柳と一緒に。

二階から、バイオリンの音。

光子 珍しいなあ、お父ちゃんがバイオリン引くやんて。

昭 ええ音やなあ、途切れそうで、途切れへん。

光子 大正バイオリン。なんで、大正バイオリン言うんやろなあ。

敏子 風に乗って聞こえてくるようや。

暗転。上手にスポットが当たる。バイオリンを弾く平太郎。横にすわって聞く笑子。

平太郎　ハハ、のんきだね！

のんきな父さんお馬の稽古

馬が走り始めたらとまらない

子どもは面白そうに父さんどこへゆく

どこに行くのかお馬にきいとくれ

ハハ、のんきだね

笑子　（拍手しながら笑う）

平太郎　のんきな父さんの坊やが裸で

かあちゃんが着物を着よと叱っても

坊やはイヤダと言って着物を着ない

「ちよいと父さん坊やが裸で困りますわよ、なんだ

なんだ……」

坊やが風をひいたらどうするんだ

出て来た父さんも丸裸

ハハ、のんきだね

光子、スポットに入ってくる。

笑子 おじちゃん、もう一回、もう一回。

光子 お父ちゃんえらいもててるやん。

平太郎 まとわりついて、離れへんねん。どや、わ
しでも猫よりましやろ。

光子 お嬢ちゃん、もう、しんどない？

笑子 (頷く)

平太郎 大丈夫やなあ。おにぎり、三つも食べたよ
って。

笑子 おいしかった。

光子 そらよかった。お父ちゃんの玉子酒できたで。

お嬢ちゃんも下行こ。二階はよう揺れるし、それ
に、サイダーあるよって。

笑子、大きく頷く。光子、スポットから消える。

元の舞台に戻り、平太郎、階段を降りてくる。

平太郎 みんな、退屈してへんか思て、一曲、歌
いに来たで。

平太郎、バイオリンを弾きながら歌う。

平太郎 おれは河原の 枯れすすき

同じお前も 枯れすすき

どうせ二人は この世では

花の咲かない 枯れすすき

敏子 死ぬも生きるも ねえおまえ

水の流れに 何変わる

おれもお前も 利根川の

船の船頭で 暮そうよ

平太郎 なんや、遠い昔に帰っていくようや。

敏子 お父さんがお酒飲んだら、よう歌うた。

壁を叩く音。

平太郎 (壁に耳をつける) どないしたん、作やん。

チャンチキおけさ、うとてくれてか? ほんなら、

こっちやおいで、そこやったら、よう、聞こえへ

んやろ。(壁に耳をつける) ここで、聞きたいや

て、難儀やなあ。月があ、あ、あ、あかん、もう
声でえへんわ。又、今度な作やん。

壁を激しく叩く音。

平太郎 怒って、壁蹴つとる。わがままやなあ、
作やん。そんなんするんやったらもう、作やんに
うとたらへんで。

壁の音、ピタツと止まる。

平太郎 子供みたいやなあ。作やん、チャンチキお
けさ、昔から、好きやったなあ。せやけど、この
歌バイオリンで弾くの難しいんやで、すぐに弦で
顔弾いてしまうねん。

光子、上手から登場。

光子 お父ちゃんが歌うやなんて珍しい事や。バイ
オリン演歌があかんようになってから、急に、働

く気なくしてしもて……。ちよつとでも、働く気
になってくれはったら、うちも楽なんやけど。

平太郎　せやかつて、わし、これしかでけへんもん。

光子　……。(ふっきるように) さあ、玉子酒出来
たで、兄ちゃんもついでやさかい、一杯よばれて。

昭　僕、玉子酒は……。

光子　あんたのは玉子なし。

昭　そうですか、ほな、ちよつとだけ。

光子　そや、サイダー忘れたわ。お嬢ちゃん、台所
の流しの上に置いたんねん、持ってきてくれる。

笑子　はーい。

笑子、上手に走って行く。昭、酒を一口飲む。

昭　台風がなんやねん。なあ、おばはん。

光子　おばはん？

平太郎　えらい酒癖がわるそうや。

光子　わるいて、いま一口飲んだとこや。

昭　一口飲んで、回ったら、悪いんか。国会で決ま
ったんか。それに占いなんかほんまに当たるんか

いな。トランプ切って、僕の人生分かるなら、僕の人生七並べつと、（光子を見て）あんたの人生、ばばあ抜き。（敏子の方を見て）ねえちゃん、僕とデートせえへん。

敏子 いやよ、酒のみ。

停電。舞台真っ暗になる。

敏子 きゃ、いやらしい。

光子 やめなはれ、兄ちゃん。

電気つく。平太郎、敏子の背後から、胸に手を回している。平太郎、客席の方を見て、ニヤリ。

光子 お父ちゃん。

（暗転）

昭 風、やんだなあ。台風行ってしもたんやるか？

平太郎 そんなことあらへん。テレビで、ほん近

くまできてるで。嵐の前の静けさや。

昭　ちよつと、表見てこう。誰のかしらんけど、傘
借りまっせ。

平太郎　わしも行く。

光子　病人がうろついてどうしますの？

平太郎　風邪なおった。

光子　あかん、あかん。病弱なんやろ、お父ちゃん。

笑子　お兄ちゃん、私も行く。

光子　遠くへ行ったらあかん、近くにおりや。

平太郎　なんや、自分の子供に言うてるよやなあ。

光子　そない聞こえますか？お父さん、あの二人、

ここから見てたら兄妹みたいやなあ。

平太郎　そうか、そう言うたら、そう見えるなあ。

あかの他人には見えへん。

昭と笑子下手へ。昭、傘をさす。敏子、光子と平

太郎の横に座る。3人が話し始めるが、客席には

聞こえない。

昭　水の流れが、えらい速いなあ。

笑子 うん。

昭 あんまり覗き込んだら危ないで。

笑子 うん。

昭 タマ、見つかったらええのになあ。

笑子 うん。

昭 うんとしかいわへんのんか？ 兄ちゃんが、男

前やから、あがつてるんか？

笑子 ちがう！

昭 こらっ

笑子、笑いながら駆け出す。昭、笑子に傘を差し

かけながら、笑子を追って、下手に消える。

光子 中学を卒業してから、弟さんと二人で、よう

頑張ったんやね。

敏子 人にかわいそうやなあ言われのが嫌やった。

変な同情がいちばん辛い。その人と初めておうた
んは、雨が冷たい日やった。お醤油こうたんです。

一升瓶でこうた方が安いよって、それと、買い物
持って、ヨタヨタしてたら、「お客さん、わしが

家まで持っていったるわ」いう声がして、後ろ向いたら、自転車に跨って、真っ赤な傘の下で、真っ白な歯して、照れたようにわろたはった。

平太郎 真っ赤な傘に、真っ白な歯。なんか他人みたいなきせえへんな。あいつ、歯だけはよかったなあ。

光子 その人は酒屋に勤めたはったん。

敏子 ええ。

平太郎 酒屋なあ……。

敏子 そんで、うちにもよう遊びに来はって。弟もなついて。せやけど、ふっと来はらんようになって。ほんまに、風みたいな人やと

平太郎 風……。 (絶句)

敏子 今度おうたんは、パチンコ屋で……。父親代わりに働いて、母親代わりに家事をして、ふうと、しんどうなって、ふらっと、初めてパチンコ屋には入ったんです。

平太郎 パチンコ屋なあ。

光子 そこで働いてたん？

敏子 ええ、ここでやり言うて、一杯玉だしてる人

のかせて。

光子 えらいことするなあ。

平太郎 ああ、間違いないわ。たたりやでこれは。

敏子 それだけ違います。ガラス開けて、777揃うまで玉入れてくれはった。うち、(間)勝ったんです。

光子 あたりまえやがな。

平太郎 それが原因で店長ともめて、店長の首締めて、パチンコ屋くびになったんやなあ。

光子 誰の話ですか。

平太郎 ……。

敏子 その人、英世という名前と違います。

光子 ……。

平太郎 (立ち上がりかけて) 東京の方はどうやる、テレビで見てもうか？

光子 (平太郎の服をひっぱり座らせる) 座ってなさい。

敏子 うちが風邪引いて寝込んだときは、三日三晩、寝んと看病してくれはりました。

平太郎 病人には優しいところがあるんやなあ。それが、たった一つあいつのええところや。

敏子 そのかわり、疲れて、一週間寝こまはったけど。

平太郎 ……。

敏子 この春、弟に嫁さんがきました。うち、うれしゅうて、肩の荷がおりたような気して。おばさん、うち小姑。

光子 よかったなあ、苦勞が報われた。

敏子 ええ娘なんですよ、ほんまに。せやけど、うちの場所がのうなつてしもて。会社でも、もう、十年。みんな結婚して行くのに、うちだけが残ってしもて。男の人も、陰で、うちのこと番茶もでがらしつて。

光子 見る目がないんや、その人らに。あんたは綺麗で。

平太郎 せやけど、家にも、会社にもおりにくいからいうて、なんぼなんでもあんなんと……。

敏子 何が辛いいうても、家がないのが一番辛い。

今まで張りつめていたもんが、ぷっちんと切れて

……。辛い時、淋しい時、うちの背中をそっと叩いてくれる風みたいな人、その温もりがうれしゅうて、（そっと、敏子目頭を押さえる）おぼさん、人を好きになるのに理由いります？

光子 （平太郎を見る）いいや、そんなことあらへん。

平太郎 （くしやみをする）誰かわしの事言うてるんやろか？

敏子 確かに、あの人は、顔も悪い、口も悪い、お金もない、頭も悪い、

光子 なんにも、そんなぼろくそにいわんでも……

敏子 酒屋にいたはった頃、忘れられへん事があります。戸をガラッと開けては行って来はった。うちは弟と朝ご飯食べてました。おかずがなくて、少しずつご飯にお醤油かけて……。うち、急いでお膳を体でかくした。あの人は、それを見て見んふりしてくれはった。ええ天気や、キャッチボールしよういわはった。弟と3人思いきり走って、思い切りわろて、あの時が、うちの青春。

昭、笑子、下手から

昭　なんか、又、雲行きがおかしいなってきたで。

笑子　雲が、飛行機みたいにビュンビュン飛んで行く。
く。

昭　雨もきつなってきた。はよ、家にはいろ。

笑子　川の所に誰かいる。

昭　えらいこっちゃ、あの人、川に飛び込むつもりや。あっ、ガマのおっちゃんが、女の人とめはつた。

風の音、雨の音。

昭　はよ家に入り、俺も助けに行く。

笑子　家にかけて込む。息を切らして、暫く声もでない。
い。

光子　どないしたん、えらい息切らして。

笑子　川に女の人が、ほんで、ガマがつかまえて、

兄ちゃんが走って行ってん。

平太郎 なんのこつちや。

作造と昭に抱えられるようにして幸子、下手より登場。作造、ガマの油売りの衣装。

笑子 (作造を見て) おじちゃん、かっこいい。

作造、正面向いて、Vサイン。

幸子 飛びこもなんて思てしません。川を見てただけです。

作造 あんなに覗きこまな見えへんか？

幸子 うちは、ランプ占いの家をさがしてただけです。

昭 ここやがな。

幸子 え、川の中に看板あるって聞いたさかい。

作造 誰がそんなええ加減なことを。せやけど、晴れた日は、あそこから川覗いたら、おまはんとこの看板、水に映って見えるときある。

平太郎 ようしつとるなあ、そいつ。

敏子 どんな人に聞かはったん？

幸子 枯れ木みたいに痩せた人で、風よ吹け、嵐よ
来たれ、せやけど、我は動かん。

平太郎 分けのわからん事言うてたんやな。来たで、
第二室戸や、えらいこっちゃ。

光子 風太郎、風太郎が帰ってきたんやろか。

敏子 約束守ってくれはった、風太郎さん。

激しい風の音、揺れる家。

光子 とにかく、はよ上がり。その娘ビショ濡れや
んか。体ふかな、風邪引く。はよ、はよ、うちの
であわへんやろけど、風呂場で着替え。

幸子 その前に、占うて下さい。

光子 占いより……。

幸子、光子を見つめる。

光子 分かった、占いましよ。せやけど、うちの言

う事も聞き、あんたは、風呂場で着替え、うちは、
あんたの声聞こえるところでトランプを切る。ええ
な。

幸子、光子に促されて上手に消える。物が倒れる
音。

笑子 怖い。

平太郎 大丈夫や、みんな、こっちや集まり。作や
んも。(作造を見て)せやけど、作やん、えらい
格好やなあ。

作造 一人で、こわかってん。

平太郎 そうか、そうか、台風で怪我したら、あん
たのガマの油一つもらおか。

作造 おおきに、平やん。十年ぶりにしとつ売れる。
はよ、怪我してや。

幸子、下手から飛び出してくる。その後ろから、
光子。

光子 その娘つかまえて。

敏子、幸子の前に立ちふさがる。

敏子 出て行っても、どこへも行かれへんよ。

幸子 行かせてお願い。お百度踏ませて。

光子 トランプがあかんだら、お百度か。何をして
も、あかんもんはあかん。二人の間には、どうに
もならへん川がある。

幸子 あの人、急に別れよ言わはった。腕組んであ
るいたこともあらへんのに、この人と一緒になる
んやてうち心に決めてた。別れる理由言うてくれ
へんだら、うち、死ぬ言うた。

激しい風の音。電球が揺れる。平太郎にしがみつ
く笑子。

幸子 嫌いになっでん、あの人言わはった。嘘や、
嘘や、本当の事言うてくれへんだら、屋上から飛
び降りる。(間)そしたら、僕の誕生日覚えてる

かつて。昭和二十年、八月七日。生まれたところは言うてへんだなあ。広島。原爆の落ちたその日に、僕は生まれたんや。今までなんともなかったから、大丈夫や思ってたんや……

光子 親御さんはご存知か？

幸子 まだ、言うてへん。

光子 親は、そんな人と結婚さすためにあんたを育てたんとちがう。

幸子 そんな人……。なんで、おばさんに、そんな事言われなあかんの。

平太郎 謝り、光子。

敏子 おばさん、ひどい。

光子 ひどいかもしれへん、せやけどそれが世間や。思っても、口にださへんだけや。きれいごとばかりで通りますか。愛や恋や、人の事やから、そんなうわつつらな事を言うんや。あんたは自分の幸せ考えなあかん。親泣かしてどうする。あんたは、映画やテレビの主人公やあらへん。まわりも違う。うちとおんなじような世間や。越えるんやったら、先ず、うちを越えて行き。しょうもない

トランプ占いのばあさんを、よまいごとや、しようもない言うて、まず、越えて行き。

光子、行こうとする幸子の手をつかむ。

光子 行ったらあかん。今は、あんだの中で吹き荒れてる嵐をじっと見つめなあかん。嵐が過ぎるまでここにおり、なあ。この家には、ようけの迷子が来る。道にまよて、家探して、ぼろぼろになつてる子もいる。他人からみたら、しようもない事でも、その子には死ぬほどの事もある。せやけど、誰もその子になってあげられへんのだ。うちは、学も徳もない。先生みたいに正しい道なんかよう教えんし、分からへん。うちにできるんは、トランプ切つて占うて、その後は、手をつないで、ほんのいっとき、迷子と一緒に迷うことだけなんや。

手を振り切ろうとして、幸子、光子の顔を見る。

幸子 おばさん、泣いてる。

光子手を離す。

幸子 おばさん、泣いてくれてるの？

光子 あほやなああんた、人の事でいちいち泣いてたら、涙がなんぼあっても足りひん。

激しく、家が揺れる。

光子 みんな、ここに集まり、この柱が一番太い。

光子を真ん中に、幸子、敏子。平太郎を真ん中に、笑子、作造。幸子と光子の間に入ろうとする昭。

光子 兄ちゃんは、戸を押さえとって。

しぶしぶ戸を押さえに行く昭。

敏子 お母さん。

光子 え？

敏子 お父さんが亡くなった時、みーんな帰ってし
もた位牌の前で、お母さんが、うちら姉弟を抱き
しめはった。あの時のお母さんのおいと一緒や。
長い間忘れてた。

光子、敏子の髪をそつと撫でる。観客席から、風
太郎登場。

風太郎 ウララ、ウララ、ウラ、ウララ、ウラの
ウラはオモテなの、ウラナイ、ウラナイ、ウラナ
イヨ、ハッー、ウラナイ、ウラナイ、アタラナイ、
ハッー

風太郎、舞台に駆け上がる。

昭 ころ、一生懸命、戸押さえてんのに、そんなと
こから入ってくるな。そこ、壁やで。

風太郎 何をごちゃごちゃ言うてるんや。わいの家
やどこからはいろと勝手やないけえ。

昭 すんまへん。

風太郎 ほんま、いつ出るんか、いつ出るんかて、
気いもたせたけんど、やつと、主人公登場や。

敏子 風太郎さん。

風太郎 なんや、敏子はん、こんなとこで何してん
の？

敏子 何してんのんて、そんなことよう言わはる。

ここで待っとけ言わはったん、風太郎さんやない
の。

風太郎 ああそうか、せやから、わし、家に帰って

きたんか。おう、ばばあ、元気か？

光子 親に向こうて、なんて言い方や。

風太郎 ほんなら、母上元気で御座るか？ お猿の

お尻は真っ赤かで御座る。

平太郎 なんで、こんなはんばもんできたんやろ。

風太郎 おう、まだ、生きとったんか。

平太郎 風邪ひいてんねん。病人には優しいんやろ。

風太郎 あ、そうか、そらよかった。

平太郎 かわいいそうや思ってくれへんのか？

風太郎 とりついた病気の方がかわいそや。

平太郎 ……。

風太郎 相変わらず、きつたない家やなあ。敏子は
ん、よう見ときや、これがわしの家や。チマチマ
して、人情や何や言うてるけど、単なる貧乏人や。
自分慰めとうるだけや。

平太郎 その貧乏人に大きしてもうたん誰や。

風太郎 なんやと。

平太郎 かにん。

風太郎 むつかしいこと言うな。(作造を見る)せ
やけど、おもしろい格好しとるなあ、どうしたん、
おっちゃん。

作造 ガマの油売りの正装やがな、風ちゃん、忘れ
たんかいな。

風太郎 そう言うたら、昔、そんな格好して、いち
びってたなあ。

作造 いちびってた……。

風太郎 いちびってても、暮らせる世の中やってん。

作造 そうかもしれへん。

光子 何を感じしてんの作造さん。風太郎も、そん
なところおらんと、家に上がり。

風太郎 ここでええ。

風太郎座り込む。風の音。風に戸とともに押される昭。女達の悲鳴。明かりが一瞬暗くなり、戻る。

風太郎 静かやなあ。遠くで虫の声が聞こえる。

平太郎 チンチロチンチロチンチロリン。

作造 そんな聞こえるか？

光子 いちびってますねんがな。

作造 なんやいちびってんのんかいな。わしアホやさかい、いちびるんやったら、いちびる言うてもらわんと。

風太郎 最初に勤めたんが酒屋やった。

平太郎 お前、酒好きやよって。

風太郎 親父と一緒に、小学校からのんどったもんなあ。

平太郎 酒癖悪かった。

風太郎 酒屋やったら、なんぼでも飲める思たんやけど。

瓦が飛んでくる。それを片手で避ける。

平太郎 お前、家の中におるんか？それとも、そこ、外か？

風太郎 喉乾いたよって、缶ビール一本飲んだら、盗人や言われた。腹立って、店の酒やビールや醬油、みんな割ったった。気持ちよかったなあ、すっとした。

平太郎 それから、パチンコやか？

風太郎 パチンコは好きやけど、自分が出来へんのでおもしろない。店長と喧嘩して、パチンコ玉床にまいたった。みんな、コロコロ滑りよって、面白かったなあ。ほんで、次はお父ちゃん何やったかいなあ？

平太郎 お前のことやから、映画館か？ コジラ好きやったよって。

風太郎 何を言うてるんや、わしの好きなのは、片岡知恵蔵や。ある時は片目の運転手、そして、その実体は

平太郎 正義と真実の人、藤村泰造。バンバン。ほんで、映画館は何でやめたん？

風太郎　ちやうちやう、映画館と違う。かってにわしの人生つくるな親父。次はストリップや。

平太郎　ちよつとは、大人になったんやなあ。せやけど、それええなあ。わし、一生のうちいっぺんでもええから、布施の晃生シヨウのかぶりつきでストリップ見てみたい。

作造　わしは、相撲を升席で見たい。

昭　僕は、すき焼きを一人だけで食べてみたい。

平太郎　みんな、男の夢やなあ。

風太郎　ほんま、ささやかな夢やなあ。まあ、年寄りはいええとして、お前どさくさに紛れて何言うた。若いもんが、すき焼きを一人だけで食べてみたいやて。

作造　せやけど、いつかは出来ると思てるうちに、年取っていくもんやで。そんなもんやで。

突風、風太郎、下手の端まで飛ばされる。突風逆向き。オットット、けんけんで又、舞台中央。

風太郎　ストリップも、切符もぎってたら、何もお

もろない。

平太郎 ほんで、次は何や？

風太郎 もう、人に使われるんは、止めや。もっと、
大きな事やったる。

婆さんが飛んでくる。風太郎、無視。若い女が飛んでくる。風太郎、片手で受けとめる。もがく女。看板が飛んでくる。風太郎の頭にあたる。女を離す。女、飛んで行く。洗濯板が飛んでくる。下着が飛んでくる。掴んで、頭にかぶる。箒に乗った魔女が、飛んで行く。

風太郎 いろんなもんが飛んで行きよるなあ。あつ、
石切さんが飛んで行く。

作造 そんな、神さんが見えるんかいな。せやけど、
ほんまに飛んで行ってしまはったらどないしよ。

風太郎 あれ、歌うとたはる。

敏子 いしきり、いしきり、いしきりですか！

平太郎 もう、大体見抜かれとるなあ。

風太郎 アッ、プレイバック、プレイバック、アッ

ハッン……

昭 時代が、ちよつとずれてんのちやいますか？

風太郎 ずれてんのはお前の顔じゃ。

風太郎、風に卷かれるように踊る。

風太郎 愛して、ハァー

夢見て、ハァー

恋して、ウー

光子 風太郎、中入り。そんなところにおったら、危ないがな。

風太郎 台風なんか、怖いことあるかい。貧乏の方がよっぽど怖いわ。こんな家、潰れてもうた方が、せいせいするわい。もう、チマチマ生きるんがいやじゃ。なんか言うたら、石切さん、石切さん言うてるけど、がきの頃、お前やったら、怒られへんさかい言うて、さい銭拾いに行かしたんは誰や。

光子 ちよつと、借りた事はある。

昭 弟か兄貴かしらんけど、英世さんとはえらい違いや。

風太郎 誰の話しや、わいには兄弟なんかおるかい。
それとも、おかあちゃん、わしの留守中に生んだ
ん？

昭 何や、嘘かいな。そら、僕らは、かど通る人み
たいやから嘘ついてても、ばれへんわなあ。

作造 嘘言うたら、風ちゃん、あんたも人の事言わ
れへん。つい、最近まで、孫の通信簿見るまで、
ずーと1が一番ええ思ってた。

平太郎 ええ、そうと違うの。

作造 べった。一番ええのは5や、うちの孫なんか
みんな5やで。

平太郎 光子、お前知ってたんか？

光子 喜んでるんやから、水さす事もない思て。せ
やけど、本人見て、分からしませんか？

平太郎 ……。

風太郎 そや、いつまでも台風と遊んでられへん。
家に入る。

風太郎、戸から、風に飛ばされるように家に飛び
込んでくる。昭、ひっくり返る。

風太郎 お父ちゃん、いや、お父上。お母ちゃん、
いや、母上。

平太郎 なんかたくらんどうでこれは……。

光子 お金やったら、ないで。お前、貧乏人、貧乏
人ってせんど言うたやないか。そんな貧乏人から
お金持っていく事ないやろ。

風太郎 言うたな、くそばばあ。

光子 母上から、くそばばあか、なさけない、なさ
けない。(目頭を押さえる)

敏子 お母さん泣かしたらあかん。うちら孝行しと
うても、いてへんのよ。

風太郎、腕組をして目を閉じる。

敏子 謝って、風太郎さん。

風太郎 (おもむろに目を開けて) ごめんな、くそ
ばばあ。

平太郎 まだ言うとるがな。

敏子 うち、考えなおそかなあ、もうちよつとええ

のがあたりそうな気がする。

風太郎 借りた金は、百倍にでも、千倍にでもして返したる。これが証拠や。

風太郎、ポケットから、地図を取り出す。

平太郎 汚い地図やなあ。あっちゃこっちゃ虫食いの穴あいとるやん。

風太郎 国定忠治の財宝のありかの地図じゃ、驚いたか貧乏人。

作造 国定忠治で、そんな金持ちやったん。

風太郎 財宝のありかの地図あるんやから、そうちがう？ おっちゃん。

光子 なんか頼りない話しやなあ。

風太郎 どっちにしろ、目指すは赤城山や。

光子 お前、その地図、どっちが北か分かるか？

風太郎 ……。

光子 せめて、地図の勉強してから行ったらどうや。

風太郎 そんなことしてたら、人に先越されるがな。

日の上がる方が東や、それさえ分かったらええ。

平太郎 地図で日の上がる方分かるか？

風太郎 (地図をじつと見る)

光子 月はどっちから上がるんや？

風太郎 ……。むつかしい事言うな。わしは行く

んや、生駒山に。

平太郎 赤城山ちやうの？

風太郎 まあええから、とにかく行かして。

敏子 うち、なにしにきたんやろ？

風太郎 金借りよと思ったから、そんな時の質札。

敏子 うち、質札？

光子 あんな事、口では言うとするけど、年寄り残し

とくのが心配で、嫁さん見せがてら、帰ってきた

んやろう。

平太郎 そうでも思わな、救われへんなあ。

風太郎、六方を踏む。

風太郎 さあ、行くでえ、帰ってこられへん旅かも

しれん。せやけど、行かなきゃならない荒海の、

女、乗せない宝船、石切神社のつるぎ剣を背おて、い

ざいざいざ、いいいざあ。

風太郎、戸口に走る。昭を見て。

風太郎 お前も、すき焼き一人で食べられるように
頑張れよ。

昭 ありもせえへん宝もんより、すき焼きの方が旨
いわい。

風太郎 あるかあらへんか、行ってみなわからへん。
おっ、忠治が呼んでる、風の音に混じって俺には
はっきり聞こえる。はよこんかい、何しとるんや
言うてる。

風太郎、戸をつき開け飛び出し、下手に消える。

平太郎 行ってまいよった。体に氣いつけやの一言
もなかったなあ、光子。

光子 情けないけど、しやない。カスでも、うちら
の子やねんさかい誰にも文句いえへん。せやけど、
行ってしもたら、何やスカみたいやなあ。

敏子　うちは、風の忘れ物みたい。何しに、ここへ来たんやろ。

昭　そういうたら、質札言うてましたなあ。

光子　これ、結構傷ついてんのに念押しせんでもよろしやろ。

敏子　ええねん、出がらしから質札やもん。

作造　風ちゃんは、照れ屋から思てることよういわんだけや、ほんまはええ子なんやで。

平太郎　おおきに作やん、風太郎が万引きしたときも、あんた近所の人に言うてくれたんやてなあ、風ちゃんは悪ない、あの家の貧乏が悪いんやて。

あん時は、家に火いつけたるか思たけど、よう考えたら、うちも一緒に燃える。

光子　作造さんの言うことが正しい。子どもは悪ない親が悪いんや。

平太郎　せやけど、今度の宝探しも一人か。ほんま、しょうもない奴やけど、徒党を組むのが嫌いで、やるときはいつも一人や、それがあいつのたった一つええとこや。

労務者風の男、A、B、C、D、E、下手から登

場

A 大将、行きまひよか。ありや、居てへんがな。

作造 徒党組くんどるがな。

平太郎 いつの間にか、徒党組むような情けない奴
になってんなあ。せやけど、あいつは、まだいっ
ぺんも、警察のやっかいになった事はない、それ
が、あいつのたった一つの……

光子 お父ちゃん。

B おらんようになったら、困ることよ。わい、
まだうろん一杯しかくわしてもうてへんがな。

C 国定忠治言うとったなあ。（作造を見て）おっ
さん、ええかっこしてるやん、芝居しよ。

作造 子分はいややで。

D しゃない、忠治やり。

作造、舞台中央に立つ。A―E作造の周りに膝ま
ずく。

作造 さあて、お立ち会い

手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四六の
ガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガマとは
ガマが違う。あんなものには薬石効能がない。手前
のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲れた四六の
ガマだ。四六、五六はどこでわかるか。前足の指が
四本、後足の指が六本。これを名付けて墓は四六の
ガマ。一年のうち、五月、六月、八月、十月に獲れ
るところから、一名五八十（ごはっそう）の四六の
ガマとも言う

E なにが、さあて、おたちあいや、おっさん、忠
治やで、国定忠治。

作造 わし、これしかできへんもん。

風の音。

平太郎 なんや、又、風がきつうなってきたみたい
や。

風太郎、飛び込んでくる。

風太郎 どしたんみんな、お百度石のところで待って
いてくれ、言うたやろ。

A 風や雨がきつうて。

風太郎 なに言うてるんや、赤城山はもつときびし
いで、さあ、行った、行った。

A これで、日当が千円やて、きついなあ。

風太郎 三食ついとる。

B わし、まだ、うろんしかたべさしてもうてへん。

幸子 私も、お百度石のどこまで連れて言って下さ
い。

風太郎 突然物言うな、びつくりするやないけ。

幸子 嵐の中で、あの人のためにお百度踏ませて。

光子 よっしゃ、分かった。一回だけまわつといで。

石切さんは百回まわられていやらへん。一回でもか
まへん。

昭 僕もついて行く。風よけぐらいにはなるやろ。

風太郎 何のこっちゃしらんけど、先行って。わし
も後から、お百度石の頭撫でに行くよつて。

平太郎 まちごても、さい銭盗むなよ。

風太郎 分かってるわい、昔の俺とちゃうわい。

飛び出す、昭と幸子。風に戻される二人。

昭 手、つなご。

幸子 え、はい。

昭 不思議やなあ、何処の誰ともしらんのに、手つないで神さん参るやて。

昭と幸子、下手に消える。舞台中央で、もじ、もじする風太郎。

光子 どうしたんや、風太郎

風太郎 忘れもんや、敏子はん、これ（手紙を片手で顔を背けたまま突き出す）

敏子 何？

風太郎 手紙や、わいが生まれて初めて書いた手紙や。さあ、行くで。みんな、バイバイや。

風太郎と仲間、一列になって、戸に向かって走る。

Bだけ上手に走る。思いつきり端まで走ってUターン。そして、戸を突き抜け、下手に消える。

光子　なんて書いたんのん？

敏子　雨に濡れて読みにくい。えーと、としよりをよろしうたのんまって

平太郎　ちよつとは親の事考えてくれてんねんなあ。

光子　あれなりに世の中でもまれてんねんやろう。

敏子　まだ、書いてある。

光子　なんて？

敏子　（胸に手紙を押しつけて）雨で流れてしもた。

光子　嘘や、読めたんやろ。

作造　わし、見えたで、言うたるか。

敏子　いや、言うたらあかん。

作造　ほんなら、自分で言い。

（間）

敏子　すきやって、ひらがな三つ。

激しい風の音、そして、暗転。

川のせせらぎ。小鳥のさえざり。鶯の鳴き声。舞台やや上手に昭。

昭 あれから、すき焼き一人で食べてみたけど、ひとつとも美味しいなかった。すき焼きは、人と肉を争うて食べて、はじめて、美味しいもんかもしれへん。

昭、上手に歩く。

昭 あの二人、結婚したんやろか？

昭、川をのぞき込む。

昭 猫は見つかったんやろか？ (間) 何んも、分からへん。分かるすべもあらへん。(間) しらんもんどうしが神さん参り。(掌を見る) まだ、あの娘の掌の温もりが残っているようや。

憲子、妙子の手を引いて下手より登場。

憲子　ほんまに、お父ちゃん何処へ行ってしもたんやろ。ちよっと目はなしたら、おらんようになってしもて、ほんまに、もう。

妙子　喉、乾いた。

憲子　しゃない、（財布から小銭をだして妙子に渡す）そこの自動販売機で、ジュースこうといで、おかあちゃんの分もこうてきて。

妙子　お父ちゃんのは？

憲子　いらん。

妙子、下手に去る。

憲子　久しぶりに、お父ちゃんの玉造の実家によって、妙子のお尻にでんぼができて困ってる言うたら、お義母さんが、そら石切さんや、石切さんや、でんぼの神さんや言いださはって、ええかげんにあしろてたら、帰り道やないの、私の孫になんか恨みでもあんの言いださはるしまつ。たまにし

かあわへんねんから、言うとおりにしたげんのも
親孝行、しゃない。

妙子、ジュースを持って、下手から登場。憲子ベ
ンチに腰を下ろす。

憲子 あんたも、座り。ああ、そうやなあ、お尻い
たかってんなあ。ほんなら、立って飲み。

二人、ジュースを飲む。

憲子 桜、綺麗なあ。ほんまに、春爛漫……。せや
けど、緑の多い、ええとこやなあ。大阪のほん近
くに、こんなとこあるて、うち、しらんだ。それ
に、神さん参りやて、日頃、何にも信心してへん
けど、わりに、気持ちの、ええもんやなあ。

妙子 あっ、お父ちゃんや。

昭、振り向く

昭 何や、お前らか。

憲子 何ややて、参道から、ふっと、おらんようにならんやから。

昭 二十年前、ここで占うてもうたことあんねん。

屁踏んだみたいな会社の先輩がおって、

憲子 どんな先輩やろ。

昭 見合いしたんはええけど、どないしよ、どないしよて、迷てるさかい、玉造のお母ちゃんがよう当たる言うてる石切さんに行って、聞いてきたるさかい言うて、来たんや。その時、ついでに、え言うてんのにわしの手相を見てくれた。(憲子の顔をじっと見る)

憲子 何やの、気色悪い。

昭 べっぴんさんの嫁さんもらう言わはった。

憲子 当たってますがな。

昭 かわいい子供に恵まれる。

妙子 その占い、ものすごうよう当たるね、お父ちゃん。

昭 幸せな親子やなあ。それに、こんな事も言うてた、上の人に可愛がってもうて出世も早い。

憲子・妙子 それは、外れや。

(間)

昭 ほんま、あたへんだなあ。先輩は、あかん言われた人と結ばれて、子供が三人、幸せにしたはる。それに比べて、わしは、上司に可愛がられるどころか、とことん嫌われて、いまだに平社員。それに……。

憲子 ……。

昭 いまさら言うてもしやあない、ほな、行こか。

(妙子のお尻を叩く)

妙子 痛い、お父ちゃんが、でんぼたたいた。うあ

ああああ。

昭 かにん、かにん、わしらここにおんのん、お前のでんぼのせいやってんなあ

妙子 痛い、うあああ。

昭 謝ってるやないか、もう、泣き止み、でんぼみ
たいな顔して。

妙子 お父ちゃんが、でんぼみたいな顔言うた、う
ああああああああ。

憲子 でんぼに顔ありますん？この子がでんぼやつ
たら、あんたは、でんぼの親か。

昭 ……。さあ、泣き止んで、はよ、石切さん参ろ。

三人が肩を並べて歩き始める。三人をスポットラ
イトが照らす。スポットライトの中で参道を降り
ていく。

妙子 いろんなお店がある。蛙の上に蛙、又、蛙。

ケロケロ、可愛い。

憲子 人形供養。人形も、遊ぶだけ遊んでぼろぼろ
にして、ほってしまいうんやのうて、こうして供養
するんやねえ。

昭 なつかしい駄菓子があるなあ。甘い豆を砂糖で
巻いたほうてん。これは、星の光や。小さい星の
形したおかき。大きな揚げせんべえは、大丸奴言
うんや。これなんや分かるか？

憲子 カルメラ焼き違いますの？

昭 わしらは、こたつ言うた。ほら、格好がよう似てるやろ。

妙子 お父ちゃんよう知ってるなあ。

憲子 駄菓子屋のぼんぼんやさかい。

昭 これで、大きしてもうたようなもんや。ほうてん一つもらおか。

微かに、バイオリンの音。

昭 えっ。

憲子 何か？

昭 いいや、別に。チャンチキおけさ聞きそびれたなあ。

上手にスポット。演歌師の衣装の平太郎、チャンチキおけさを弾く。

平太郎 あいた、又、顔弾いてもうた。

小さくチャンチキおけさ。

妙子 あつ、大仏さんや。

昭 石切大仏か。前にはいたはらへんだと思う。立派なもんやなあ、手、合わしとこ。

(間)

憲子 耳ダレ、耳ナリ、人の数だけ病気もある。

昭 洋服屋に八百屋、おもちゃ屋、漢方薬局、占い。

神さんも一緒に住んだはるみたいや。

(間)

妙子 たこ焼き、お好み焼き、おうどんやさん、釜飯。

昭 お参りしてから、帰りに食べよ。どれにするか、

妙子 よう見とき。

憲子 うちは、七味こうて帰ろ。

昭、平太郎の方を振り返る。

昭 あの人ら、元気にしたはるやろか？ たった、
一日の事やったけど。

憲子 え？

昭 いいや、なんもあらへん……。せやけど、二十
年か……。ようしらんけど、お能の舞台では、ぽ
ーんと飛んだら百年が過ぎるらしい。それやった
ら、二十年は一足か……。

三人観客席に降りる。スポットライト

昭 なあ、妙子、人生って言葉分かるか？

妙子 うん、まあ……。

スポットライト一段と小さくなる。

妙子 そんなきつう手にぎらんでも、迷子にならへ
ん。

昭 妙子、人生で、もし迷子になったら……。

(間)

昭 道を教えてくれる人よりも、一緒に迷うてくれる人を探し。

スポットライト消える。バイオリン演歌が小さく流れる。

―幕―

引用文献 大道芸口上集

(久保田尚 評伝社)

平成十年二月七日